

特集 表現の水脈をたどる

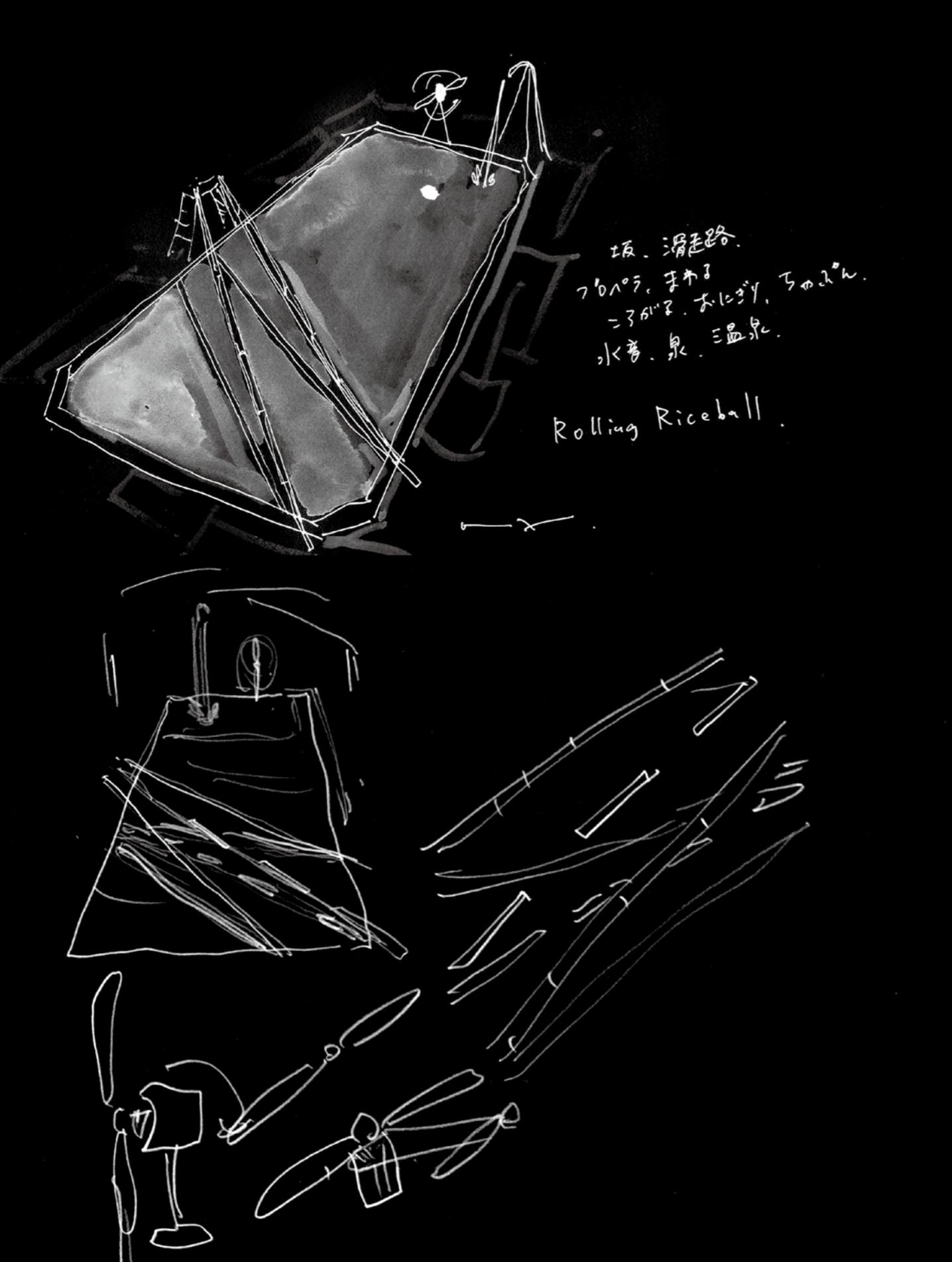


東北の風景をきく

FIELD RECORDING

vol.
02

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO



坂、滑走路。
フクハラ、マキ子
ニ子、おにぎり、ちのまん。
水、泉、三温泉。

Rolling Riceball

東北の風景をきく

FIELD RECORDING

vol.
02

特集 表現の水脈をたどる

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

写真左の白い囲いは、除染廃棄物などの
仮置場。国道6号を進み、目の前の坂を越
えたと浪江町があり、その先に東京電力
福島第一原子力発電所がある。
2018年10月5日(福島県南相馬市小高区)
Photo by Takahiro Yamashita





いわき市から浪江町に向う途中、ニッ沼
総合公園横の国道6号。2011年8月6日、こ
の路上にてかめめマシーン『福島でゴドー
を待ちながら』(P.60)の上演が行われた。
2018年10月4日(福島県双葉郡広野町)
Photo by Takahiro Yamashita



はじめに

東日本大震災から8年目

沿岸部では大規模な造成工事が進み、安定していく風景のなかで、静かに潮目は変化し続けています。以前の暮らしに帰ろうとする人。離れることを決める人。いまでも続くさまざまな境界線の書き換えは、震災以降東北の地に訪れた人々も同様に、暮らしの在りようを変化させています。これまでとは違う「日常」に向かう道の途中。いま、東北の地では何が起きているのだろうか？

特集は「表現の水脈をたどる」

東北の地での実践に出会ってゆくと、過去の経験やほかの地の実践や人々の姿につながってゆくことが起きます。それは、震災直後の自身のふるまいだったり、その地で暮らす他者の経験、そして震災とは関係のない出来事までほんとうにさまざまです。いまわたしたちが目撃している「表現」は、地中の水脈のように見えにくい経験のリレーとして現在に現れているものなのかもしれない。目に見える表現だけでなく、その背景には、どのような態度や作法が育まれているのだろう。

そこで今回は、現在と過去を行き来しながら、土地を歩き、東北から現れてきた表現の水脈をたどってみることにしました。

東北の風景をきく

2016年はインタビュー集『6年目の風景をきく』とともに歩みを進めてきた方々の声を手がかりに、震災以降をふりかえりました。2017年に創刊したジャーナル『FIELD RECORDING』は変わりゆく震災後の東北のいまと、その先にふれたいと思います。

人に会い、声と向き合い、土地の風景と出会い直す。そこから出来事を分かちもつ技術について考えたい。なぜなら、東北で起きていることは、震災の経験に限らない「わたしたち」の「平時」と地続きだから。

まずは、歩いて、その声を記録することからはじめます。

*『6年目の風景をきく』と『FIELD RECORDING』のバックナンバーは、ASTTのウェブサイト(asttr.jp)にてPDFダウンロードが可能です。

FIELD RECORDING

vol.
02

東北の風景をきく

特集 表現の水脈をたどる

10 Interview

きむらとしろうじんじんさんにきく
名付けられる側に回り続ける

18 Memo

2011年3月11日～2012年10月10日
きむらとしろうじんじん

38 さみしさという媒介についての試論

瀬尾夏美

46 旅するからだ:ことばと絵をつくる
ふるさと

瀬尾夏美

50 8年目の荒浜を歩く 村上 慧

54 Conversation

くり返し、くり返し訪ねる

「RE:プロジェクト」座談会

60 東北からの表現

かもめマシーン『俺が代』
中崎 透『Like a Rolling Riceball』

68 わたしの東北の風景

70 編集後記 佐藤李青

72 参加者一覧

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

陶芸とお茶屋台を行う「野点^{のだて}*1」。素焼きのお茶碗と窯、お茶道具一式をリヤカーに積んで、路上などまちなかのさまざまなスペースに出発。参加者は、器に絵付けをして釉薬を塗り、楽焼き^{らくや}という方法で焼き上げられた自作のお茶碗で、その土地の、その日そのときの風景のなかでお茶を楽しむことができる場です。地元の人に挨拶をして、一緒に歩いて、話し合いながら開催場所を決める。そこにはどのような態度や作法があるのでしょうか。今回は、震災以降毎年、岩手県大槌町とおおつち釜石市に通ってきたきむらとしろうじんじんさんに、これまでどのようなことを大事に野点をひらいてきたのかを伺いました。

構成 | 川村庸子 写真 | 梅田彩華

*1 大槌町と釜石市での「野点」

大槌町は、豊富な海の幸に恵まれた漁業や内陸部での農業が盛んな、太平洋に面した地域。東日本大震災では、津波と火災によってまちの大半が壊滅的な被害を被った。行政機能も一時停止し、数日間外部から孤立。死者・行方不明者数は、約1,274名に上る(2018年8月現在)。

釜石市は、これまで何度も津波の被害を受けてきたため、釜石湾の入り口に世界最大深の防潮堤を整備していたが、東日本大震災が引き起こした津波は、防潮堤を倒壊し、市の中心部にまで達した。死者・行方不明者数は1,146名(2018年8月現在)。

「野点」は、このふたつの地域で2012年から2014年までArt Support Tohoku-Tokyo (ASTT)の一環として実施。2015年からは地元の有志と共に自主事業として現在も継続している。

名付けられる側に 回り続ける

きむらとしろう
じんじんさん(美術家)にきく



2012年10月7日(岩手県大槌町駅前)

——震災から8年目を迎えましたが、いまどのようなことを感じていらっしゃいますか？

8年目っていう話にはよくなるんやけど、7年目だ8年目だって数字はあまり意識してないですね。大槌は、8年分のとっても具体的なたくさんのお客様に支えられた唯一無二の現場。でも、それはほかの土地のどの現場も同じ。1年ぶりに会うお客さんや、手伝いに来てくれた人たちのことを、「震災から何年目」という視点で見ることをしてない。そういうふうにはせんこうとしているわけではなくて、野点っていう行為はそうなっちゃってるんやと思うんです。

野点は、名付ける側ではなくて、名付けられる側に回り続けるっていうのが基本なんです。むしろ「名付けてたまるかっ！」って思いながらやってる。だから「被災地」や「被災者」をどう捉えるかではなくて、僕がそこにいるおっちゃんやおばちゃんにどう捉えられるか。おもしろがられるか、つまらんとされるか。その在りようが野点だと思う。そういうルールみたいなものがありますね。「いやあ、1年ぶりですね。どうしました？」と話しかけて、「お店続けたらって言ってくれる人もいるけど、いまから店を出すと、結局子供たちに借金を残すことになるから、やっぱり諦めようと思う」という話をきいたりもしますが、それを「被災地のいま」として抽出したくない。もちろん震災のときの話も、震災を経たいまの心境についてもたくさん話すし、僕も震災がきっかけでここに来た。それぞれの友人やお客さんたちと震災の話はし続けるんだと思います。でも、僕はとにかく大槌や釜石の人と野点がしたいんです。確かにきっかけは震災。でも、ご縁はご縁です。

**野点は、名付ける側ではなくて、名付けられる側に
回り続けるっていうのが基本なんですよ。
むしろ「名付けてたまるかっ！」って思いながらやってる。**

「被災地の方々」なんて観念的で大きな名前は使いたくないし、具体的で小さな名前をひとつだけ何かの象徴のように取り出して語りたくもない。で、ごによごによしてあるあいだに8年経ってしまった。言えない、言いたくない、言わんこうとしている、が全部混じっているような気がします。

——「名付けられる側に回り続ける」という感覚は、どのように培ったものなのですか？

1990年代、京都で『エイズ・ポスター・プロジェクト(APP)*2』というNGOの運営に関わっている1995年に野点をスタートした。そして、2004年から2007年にかけて、西成(大阪)で長期にわたって野点を行った経験*3が大きく影響していると思います。

西成は、たくさんの大きな名前を背負ってるまち。その路肩で野点をやっていると、横で風呂敷広げて捨ててきた100円ライターを50円で売ってるおっちゃんも

いたりするわけです。そこで大切なのは、僕が西成やおっちゃんをどう名付けるかではなく、おっちゃんや道行く人が僕を、野点をどう名付けるか。そして、それに対して僕は堂々と「ここが僕の現場です」と言えるかどうか。そういう態度でない限りここには立てない、と強烈に感じた記憶があります。

APPの活動は、エイズという病そのもの以上に、それが持つ

*2 エイズ・ポスター・プロジェクト(APP)
1993年に設立された非営利民間団体。エイズに関する誤解や偏見を解き、エイズとともに生きる人やセクシャリティの多様性などについて考えるために、ポストカードなどを使ってエイズに関する情報やメッセージを発信。シンポジウムやクラブパーティー、教育現場での性教育も行ってきた。

*3 西成の経験
創造活動の現場をまちなかに開拓し、現代の「芸術の役割」の再考や「芸術と社会の生きた関係」の再構築を目指す『Breaker Project』のひとつとして野点を実施された。2018年からは廃校で発見された陶芸窯を中心に「作業場@旧今宮小学校」も始まっている。



2012年10月3日(岩手県大槌町桜木公園)

イメージが人に与える影響に対する活動でした。新たなことばや名前を獲得することが人にどれだけ大きな影響を与えるかということを実感し、大きな意義も感じつつ、たぶん野点を始めた頃から徐々にだと思ふんやけど、名付けによって固定されてしまう関係性や、名付けあいもたらす分断や思考停止への違和感も大きくなっていったような気がします。大急ぎで名付けてしまったためにこぼれていったもの、ひょっとするとまったく違う地面にあるものを、野点でもう一度ゆっくり噛み締めるようなところがありますね。

——東日本大震災が起きたときもそうした違和感を感じたのでしょうか？

そうですね。「復興」や「再生」「絆」などの大きなことばや観念的なスローガンに感じていたような気がします。

エイズNGOや西成での経験とともに、2008年に関わった大きなアートプロジェクトでの経験も、いまの自分と野点に影響を与えていると思います。もちろんとても大きなプロジェクトだからいろいろな立場や考えがあるし、当時の一側面しか知りませんが。

僕から見たそのプロジェクトは、警察と行政、「地元の人」と呼ばれる人たちとアートプロジェクトが一体となって「このまちにいい人／悪い人」「あっていい風景／あってはいけない風景」というはっきりとした太い線引きを行い、アーティストを呼んで、まちの新しいブランディングを行うものでした。その過程では

僕は、できれば、 褒められもするし、けなされもするという状況に ちゃんといたいですね。

その線引きを守るために辻々に機動隊員まで立った。野点なら越境できると思っていたんですが、驕りでしたね。身動きがとれなかった。僕はそのプロジェクトの広告塔のようにドレスを着て路肩に立っていた。そんな太い線引きで囲い込まれた場所はもうまちではないし、ましてや路上じゃないですけどね。そのことに関しては未だに自分を許せてないんです。…いや、かっこつけてますね、主催者や関係者の方々のことも許せてません(笑)。

まちを巨大なミッションで囲い込むというのは、取り返しのつかないことになってしまうこともあるのだなと思いました。ちなみに、そのプロジェクトにおける「地元の人」はあきらかに土地を持つて人のことでしたね。出稼ぎの人、賃貸の人、もちろん路上生活の人は地元の人には入っていません。

野点をやっているときは、どこかでずっとよそ者アイデンティティーのようなものを持っている気がします。屋台の出稼ぎの季節労働者っていうか。だけど、いまこの道幅にリヤカーを置いたときに、テントの足がどこまで来て、どこに緊急車両を通行させる幅を確保できるかについて、こんな真剣に考えてる人間は僕しかない(笑)。そういう意味では、いまこの路上において僕は一番地元の人やとも思う。そういう最大瞬間風速的な地元感を言い訳にして、そして、名付けられる側であるということによって、誰かの地元にぎりぎりよそ者が立つていう経験を積んできたように思います。

—— 阪神・淡路大震災のときは、どうでしたか？

僕が野点を始めたのが1995年1月。阪神・淡路大震

災の直前で、ちょうどAPP主催で『オムニバス』という合同展覧会を京都でやっていた時期でした。で、震災に対しては何も行動を起こさなかったんですよ。一緒にやっていた人たちと神戸に行くかどうかを相談した記憶がありますが、結局結論が出なくてある種やり過ぎたような気がします。

展覧会が一段落した2月頃、美術家の^{しまぶく}島袋道浩くんを訪ねて神戸に行きました。島袋くんが阪急電車沿線の壊れてしまった家の屋根に「人間性回復のチャンス」っていう看板を出したり、通りすがりの人にひたすら花を配るということをやっていて、その花配りを手伝いに。長田はまだ焼け野原で、鉄骨がソーメンみたいに焼けただれていて、阪急前のそごうが崩れていました。きっとそのとき何か思ったはずなんですけど、あまり覚えていないというのが正直なところですよ。モヤがかったのはなぜなんだろうと思います。

—— そうすると、いわゆる「被災地」と呼ばれる場所に自覚的に野点をしにいったのは、大槌が初めてになるんですね。どんなことを考えましたか？

どんどん説明しづらくなりたくて、大槌や釜石に行っているような気がします。ことばを失いに行ってる面がある気がして。具体的な作業をいろんな方々と一緒にすればするほど、現地のさまざまな状況を知れば知るほど、現場をやればやるほど「被災地」や「被災者」という大きな括りでは話せなくなってきて、人に説明できなくなっていくんですよ。いまは「それでいいのだ」と思っています。

大槌に関わるようになったときに、関西など離れた

場所にいる人たちのあいだで「いまできることはない」「対人援助のプロしか入れない」という声もきこえてきたんですけど、初めて行ったときに「この状況に対するプロって何やねん！」って思いましたね。もちろん個別具体的な局面に対するプロの技術は必要ですが、なんちゅうか…「判断」って、そんなにできるもんなんですかね？ あの状況を、離れたところで判断できるって思える判断こそが信用できん(笑)。

大槌で会ったベテランボランティアの人が、あるときすごく怒ってたんです。ある新人ボランティアが仮設住宅に行ったときに、おじいちゃんが「寒い寒い」って言うから、走り回ってこたつを探し出して与えた。それに対して「そんなこと一人だけにしたら駄目だ」「ボランティアの基本がなってない」「早く帰ればいいのに」って。そのとき僕はなんとなく反論できずにうなずきながらも、内心「ほんまに、それじゃあかんのか？」って思ってたんですよ。寒がってるおじいちゃんに反射的に反応してしまうような人間が外から入って来るのはあかんのかと。いや、ヒューマンズの話ではなくて。そういう話じゃなくて、ほだされてなんもわからんと来て「わかっとらんあ」と言われる…。それは大切なことだと思うんです。言われる側にも、そして、たぶん言う側にも。「町民さん主体のまちづくりを」って何人もの「有識者の方々」が何百回も言うてたような気がします…言うてる人の主体はどこにあるのか？ と

思いましたね。町民主体のって言いながら、当事者と呼ばれる人のことばや在りようを人質にとってるような…。なんか、どうにも嫌です。

大槌は防潮堤がいよいよ完成しますよね。海が見えなくなる。防潮堤の大きさに対する賛否を訊ねられた当時とは意見が変わってる人もいるだろうし、賛成だった人も反対だった人も、すっきりしてる人なんて誰もいないだろうと勝手に想像しています。それぞれが苦い思いも噛みしめながら、この先の防潮堤のある



2012年10月3日(岩手県大槌町桜木公園)



2012年10月3日〈岩手県大槌町桜木公園〉

風景と何十年と付き合いにくらうと。

2012年に野点をした赤浜は盛り土をして、いまは一目ではどこなのかさえわからないし、瓦礫とホームの痕跡しかなかった大槌駅はついに開通するし、桜木町の公園の向こうには高速道の橋梁が出現して空の風景が激変しています。そんないまの風景のなかで、もちろん震災の記憶も震災前の記憶も含めて、これからも大槌や釜石の人たちと会いたいですね。通える人は通ったらええと思います。僕は、できれば、褒められもするし、けなされもするという状況にちゃんといたいですね。

2011年に初めて大槌に行ったときに、お世話になったお寺の和尚さんに「まあ、じんじんさん、はっきり言ってありがた迷惑なんだよなあ。ま、引き受けるって決めたからにゃあ、俺はやるけどな」って言われて、すごく救われました。「正直に言ってもらってありがとうございます

ます。そのことばでぎりぎりここにいられます」って。

—— そのためにも実際に「路上」であることは大事なように思いますね。路上であるというのは、公の場というか、みんなのものとして捉えているということでもあるのでしょうか？

そうですね。観念的な意味でもそうですが、やっぱり物理的に路上であることが大事やと思っています。老若男女、不特定多数の人が出入りできる。おもしろいと思ったら寄って来れるし、つまらんかったら立ち去れる場所。野点を気に入っている人だけじゃなくて、迷惑に感じている人も文句を言いに来られる距離感。まあ、路肩で900度の窯を焚くこと自体、迷惑行為ですから(笑)。

2016年に山谷（東京）で野点をやったときに、酔っ

払ってのそのそして一人のおっちゃんがずっと野点を見物していて、あまりにもふらふらしてるからスタッフが気を遣って椅子を用意したんです。そうしたら、だんだんちゃちゃを入れ始めて、お客さんのお茶碗にもあれこれ言い出して、しまいには「俺は、お茶に詳しい」って。「どこで勉強したんですか？」ときくと、「愛媛刑務所！ 刑務所のなかに茶道部があるの知ってるか？ 俺は愛媛刑務所茶道部出身だ」って。で、いなくなったと思ったら1時間半ぐらい経って戻ってきて「お茶いただくわ」って。どうやらその日は立ち飲み屋に行くのを止めて、野点に300円使うことを決めたらしいんです。僕にとっては最高の荣誉です。

路上でやってると、必ずそれぐらいの奇跡は普通に起こるんです。奇跡と呼んでいいのかわからないけど、そのおっちゃんにとってはすごく大きな選択だと思うんですよ。

僕は野点原理主義者かつ作業原理主義者。「被災地」という大きく名付けられた場所でも、作業を介してなら個別の「〇〇さん」と出会えると思ってる。リヤカー運ぶのもテント建てるのも力を合わせなあかんし、お茶碗を磨いて綺麗な色が出てきたらびっくりもする。それは被災者であろうが支援者であろうが関係ない。考え方や仕組みの提案でなく、作業をしている姿やふるまいを通しての交感、その風景が人に与える影響を一番信用してますね。

—— 2016年から釜石では、野点だけではなくて、ぐるぐるミックス*4もやっていますね。どうですか？

*4ぐるぐるミックス

子供と大人と一緒に「遊び」を生み出す創作教室。年齢や職業もさまざまな大人たちがスタッフやゲストとして関わり、「ミックス」な場をつくり出す。一人ひとりが持つ表現意欲を尊重し、技術の習得や完成させる義務が先立つのではなく、子供を惹きつける「遊びのプロセス」によって好奇心を引き出し、さまざまな素材や手法と出会いながら、からだ全身でたくさんの発見や発明に出会える環境づくりを心がけている。2016年度からASTTの一環として「ぐるぐるミックス in 釜石」を開始。企画・運営は、一般社団法人谷中のおかって。

かまいしこども園でのぐるぐるミックスは、僕にとっても新しい現場なんです。普段京都の私立幼稚園でこども造形教室をやっているのですが、その子供たちが「親」か「先生」としか会えない枠組みや状況に限界を感じて、谷中のおかってと一緒に立ち上げたのが、東京でのぐるぐるミックス。そのま

ちにいる文字通りいろんな大人たちと子供がどのように出会うかを、遊びを通してつくる試みです。人が暮らすまちには、人の数だけ作業がある。アーティストと呼ばれるかどうかに関わらず、大人が一生懸命やっている「作業」というのは、大工さんも八百屋さんも、会計士さんの作業も、子供から見たら全部魅力的であるという確信が基になってます。そして、釜石でのぐるぐるミックスは、「こども園という特定の場所」と「保育士さんという特定の職業の大人たち」と出会い直す機会となっています。園の先生方とあれこれや課題を一緒につくったりはじめていて…まだまだ道半ばですが、ほんまおもしろい。

保育士さんというのは、1年間365日子供の面倒を見続けている、それこそプロフェッショナルな仕事です。一緒に運営してる地元NPOスタッフの方が震災のとき、避難先の病院で手に入ったお菓子を当時の釜石保育園から避難してきた子供たちに配ろうとしたら、保育士の先生が、そのときにいた子供たちそれぞれのアレルギーに合わせてそのお菓子を即座にパバッと選別して渡した、という話をきいて。僕はなんかちょっと涙が出るぐらい感激したんですよ。そういう人たちが、ぐるぐるミックスに可能性や魅力を見い出してくれているというのはすごいことです。すごい越境。

もちろん意見が違うこともあるし、やりとりもめっちゃぎくしゃくしてるし、まだまだ「アーティスト」特別枠的な扱いなんだろうけど(笑)。でも、たぶん先生方も日常での子供たちへの名付けを越境したい気持ちを持っていて、そのヒントを感じ取っておもしろがってくれているんだと思うんですよ。なんかこのぎくしゃく進んでいる状態が、最近おもしろくてしょうがないんですよ。

2018年8月12日 東京・山谷にて

きむらとしろうじんじん(美術家)

1967年新潟県生まれ。身長190cm。京都市立芸術大学にて陶芸を学んだあと、京都をベースに活動。1995年から「野点」をスタート。以来、現在まで国内外のさまざまな路上、公園、空き地などで開催し続けている。

2011年3/11直後 ~ 取手井野団地お茶会まで

3/11(金) ~ 12(土)

- 幼稚園でニュースを聞く
- 仙台にTel通じる
- 帰宅インターネット動画を一晩中見る
- 仙台・仙南・取手・東京・水戸・青森・福島の
方々にメール
- 東京・取手・仙台より返信あり
- 青森・水戸より返信あり
- 取手・井野団地でのTAP企画の
「野点 + Takibino」の積み込み・出発準備を
ひとまわしストップ

3/13(日) ~ 20(日)

- この間 仙南・福島・水戸などが多くの返信あり
- 13日からメール・電話で取手での野点を
どうするかのやりとりがスタート

●幼稚園の年度納めの仕事を終えた日、取手での野点出始めるとこだった

●最初に浮かんだ別れた仙台の2青森〜水戸と顔が浮かぶのは2月に「じゃあ年度もよろしく!!」とタフの顔 そこから取手〜仙南〜野点の友人・共犯者・スタッフ・お客さんの顔が浮かぶ

●「顔」が消え「大震災・大惨事」「原発の状況を」「ネット上のコメント」を台まわしてみたり
「顔」が「観」といふ大きなラベルが浮かぶ。何とかして判定しよう」としてみたり。に対する分析・判定」が頭の中で……放っておくと、急的(?)、になっていく恐怖

●「あかん、具体的に自分と自分に言い聞かせ始める(多分、今もそうである)」
●とにかく顔が浮かぶ容姿を認識し、人が人達と連絡をとりたかった。話したかった

●「大きな予震が」「第一、道路・鉄道こまごまの結論僕自身の中にも、企続く中で案をたくのは論タト」・カソリニ……野点本体は重くないはずに出た、がそこが先は画者の方々の中にもいろいろ考え迷い
●福島の原発と放知識もなくどう射能の話考え、判断していいの……
●700野球、各種話が色々聞こえてくる イベント、お花見などに関する

野点でお世話になった人達と野点でお世話になった風景だけか、手がかりがあった(しか手がかりがなかった)

人と風景が同時に失われる衝撃と恐怖

どんな風景であっても「人と一緒に見て」「人とどこ現場をやって」きたということ

京都と野点開催地在住の感覚それが自分の「日常」であったということ野点を行った土地と人が、自分の精神を支えていること

野点を行った土地、行おうとしている土地の具体的な風景や人の顔……その延長線上にをりまわり(いつか)「被災地と呼ばれる地域」が、思い浮かぶ……どうも自分には、そのルートしかない気がした(今も、している)

こんな時こそ〇〇をこんな時に〇〇なんてどちらにも強い違和感〇〇には文化・スポーツ・アート・音楽・文学…色々な言葉が入って語られた。こんな時って、どんな時のこと?

野点では、開催場所を地元の人たちと相談しながら決めていくという方法をとっています。震災後、どのようなことを考え、どのように行動したのか。説明会や散歩会、当日の様子など、2011年3月11日から2012年10月10日のあいだの思考と感情の逡巡を記したメモです。

*2012年12月26日に開催されたTokyo Art Research Lab「日本型アートプロジェクトの歴史と現在」のレクチャーで配布したメモを掲載。このときの内容は、熊倉純子監修「アートプロジェクト 芸術と共創する社会」(水曜社/2014年)所収の「大槌での野点」一押し売り、ありがた迷惑に詳しい。

3/23(水) ○取手・井野団地で「お茶会+たき火」を行うことを企画者TAP・じんじんで決定

3/24(木) ○取手入り

3/25(金)・26(土) ○仕込み作業+ミーティング

3/27(日) 取手井野団地お茶会本番

- ・(お茶碗作りはなし)お茶席(じんじん)
- ・マキストーブ 屋台×2 (TAP号、マエ号)
- ・コタツ×3
- ・一斗缶 たき火×2
- ・たき出し・お菓子いろいろ

3/28(月) ○片づけとミーティング

3/29(火) ○取手を出て東京・谷中へ移動

4/15(金) ○仙台市市民文化事業団のスタッフへ長いメール(次ページ参照)

6月 ○仙台市市民文化事業団の方々とミーティング
秋の仙台野点の開催を決定

8月 ○仙台野点1回目の下見+場所探し散歩
説明会+ミーティング

9月 ○仙台野点2回目の下見+場所探し散歩
説明会+ミーティング

- 放射性物質の現状 余震が続いている中
これに人を誘うこと

- 僕が「決めた」(おま
のは 井野団地の方々
「おがまま方もしらんけど」
「家にもってニュースた
「家にいるおじいちゃん
「お茶菓子ほ私か
という声があると(伝

- たくさんの人が来た、
● 「久しぶりに会う御
● コタツ・薪ストーブ
● 外に出て・人に会い
● 相馬から避難難して
● ティサービスの看護

- 「また会えた!!」の喜
● 仙台やその周辺の地
● 仙南野点の友人に会

に関する判断基準が中
屋外でイベントを行い

らく企画者の方々もこれで決めた?
の中に

わたしは、やりたいわ

け見てたらおもしろそう、外に出たい

おばあちゃんを連れて行くわ

作っていくから

間で)聞いたこと

多くは団地の方々

近所さん達

一斗缶たき火に人が集まる

風景を人と一緒に

たくさんいたというこ

きた友人を連れて方

師さんとおじいちゃん・おばあちゃん

びの場となったスタッフ募集説明会

域の様々な話を聞く

いに名取に行き閉上浜と

ませんか?」言ってもらえたから行けた

の抵抗感があった。

人が住んでいる土地で、1人でも「やろう」と言ってくれる
人があるなら.....行く。
野点に関しては他に判断基準はない

野点を取り返したいという感覚もあった気がする。
何から取り返すのか?

実施の判断が「よかったのが・悪かったのが」
「正しかったのが・間違っていたのが」は今もって
(今のほうが...ですね)あからずくよくよしている。

「やりたい」の声を聞いた時に思ったのは、
これまでの井野団地の方々とのやりとりは
ええやりとりだったんだ.....ということ。

今(2012年12月)ならどう判断するのだろうか?

慰問でもなく・支援でもない
「団地のみなさんとTAPとじんじんの茶会」だった
と思っっている

「被災地(と呼ばれる場所)」のそれぞれの人か
受けたダメージがほんまに、ほんまにいろいろ様々で
あることを仙台・名取で実感する。

「被災地・被災者・復興・支援」という「大きい言葉」
がどんどん空疎に聞こえてくる。

仙台の〇〇さん・名取の〇〇さん・松島の〇〇さん
との関係を僕にとって一番具体的な
「被災地」との関係。

仙台市市民文化事業団のスタッフ(当時)の方から個人的に

「震災後の文化事業」・「被災者の心のケアとなるような事業」について相談(いや、問いかけ)を受け、その返信のメール 4/15 (当時の原文のママ抜粋)

○もちろん衣食住が何よりも優先であるというのは大前提ですし、もし、それがまだまだ足りないのであれば、何よりもそれが優先され続けなければならないというのはきっとどんな立場の方々も考えておられることでしょう。「復興」や「新しい街のあり方」などなど・・・関西で見える情報・ニュースには勇ましい言葉が並んでいますが、目の前で家族・友人を失った人、家も仕事も日常にまつわるすべてを失った人にとっては、きっとそんな勇ましいビジョンなんて、ほんま、今は何の助けにもならんのだらうと(これも勝手な想像ですが)思ったりもします。

個人・家族・友人・・・その人が「具体的に成れる」範囲の中でできることをするのが最優先・・・という状況が多く地域で続いていくのでしょう。つまり、もし「事業」という大きな単位で考えるなら、しばらくは衣食住に関わらない事業はやめていいんだと思う。

・・・でも・・・ここから先の僕の考えは、この「でも」の後に続くものです。

○でも、(あえて言います)今までだって、ほんとは「そう」であつたはずで、すべての人に衣食住が十分に行き渡ってる社会が実現したことなんて今までなかった。

こんな未曾有の緊急時でない、日常(と呼ばれる)時であっても、「文化や芸術(と呼ばれるもの)にまつわる事業」が「一度にものすごく多くの・多種多様な状況の人々に対する心のケア」として即効性を持って機能したことなんてなかったのではないかな？

むしろ「多くの人」や「被災者」や「心のケア」や「復興」と一言で言うてしまうことのできない人間の精神のモヤモヤした部分こそ「何か」届いて欲しいという願い・・・スローガンとして大きくかかげてしまうことがためられるような「予感」や「違和感」を目に見えるものにしたという願い・・・でも、そこには何か普遍的と思える大切な部分が含まれているのではないかな・・・。

そんな、ある人にとってはとてもノンキに思える・ある人にとってはとても切実な、また、ある人にとってはバカバカしい・ある人にとってはあまりにも漠然として捉えたい願い・・・それが(少なくとも僕が物心ついてからの時代以降の)「文化・芸術(と呼ばれるもの)」に求められてきた大切な役割の一つなのでは？・・・とも思います。他の人のことはわからない、でも、僕にはそう思えます。でも、それが正しいかどうか、わかりません。

○何をやるにしても、行う人(達)の腹のくくり方ひとつなんだらうと思います・・・たぶん。

○被災の物理的な状況・それぞれの人が心に受けたダメージがこれだけ多岐にわたっていて、深さも・方向も・大きさもそれぞれ・・・つまりは「計り知れない」状況である今。おそらく「市民」や「街」や「事業」という大きな単位・くくりで何かを語るということがとても困難な(現地では特に)状態であろうと想像します。「今だからこそ〇〇を行うべき」「こんな時に〇〇なんて行ってはいけない」・・・きっとどちらも正しいし、どちらも間違ってる。あまりにも想像を絶する事態で「今」や「こんな時」が一体「どんな時」なのかきつと一つの状況としてまとめることなんて誰にもできないのだと思います。そして、それが当然だと思います。もちろん「アート」や「文化」にしても同じ・・・いや、なおさらですね、大きなフレームやスローガンは何かを言っているようで、何も具体的なことは言っていない・・・。

でも(繰り返しをお許しください)本当は被災時でなくてもそれは同じなのだと思えます。

人間の精神が何によって支えられているか、何がその人にとって今大切な心の杖なのか、今一番必要としているケアとは何なのか、・・・これは、そう簡単に「これだ」とは言えないものはず。

今まで事業団の方々が、なぜ「アート」と呼ばれる「有史以来の、人間の想像・妄想・表現にまつわりありとあらゆることから・やりとり・思考・そして行為の結晶」(僕はアートをそう解釈しています)を根幹に据えて・重要視してきたかの理由は、きつとその「簡単に整理なんてできない人間個々人の精神」に何か影響を与えることができると予感して(それがほんの少しの予感だとしても)(それに即効性がないとしても)のこと・・・なのであると思いますし、その行為・現場の積み重ねが、少しづつであっても街の様子を変え・街の懐を深くしていく未来を夢見て・それに(ひとまずであれ)賭けて・・・のことであろうと(誠に勝手ながら)思っています。

だとするなら、事業団の皆さんがこれから行う事業はきつと今までやってきたことの延長線上にあるはずだと思いますし、今までも・これからも「そう」であつて欲しいと願っています。

それは、決して「今まで通り・同じように」などという意味ではなく、「今まで以上に予感に対して腹をくくった行為」という意味で・・・です。

○「市民文化事業団」が行うべき事業があるとするなら、事業団として信じるに値する「魅力的なこと」こそを(これまでも・これからも)行うべきだと思う・・・僕の思いは最終的にはこの一点に尽きます。

以下省略

2011年秋の仙台野点 ~ 岩手・大槌での野点決定まで

10月 仙台野点本番 (2回)

・南光院丁と希町公園で開催

11月末 ○秋の野点ツアーの最終開催地
東京・谷中で、熊倉さん・森さんより
「釜石で野点をやらないか？」の提案

○12月に下見に行く話が出る

12/10 (土)

- 夕方釜石着
- コンビニで懐中電燈を買って、港方面を歩く
- 森さん・熊倉さん・佐藤さん・佐々木さん・川原さんと食事・お話し

12/11 (日)

- 午前中 川原さんと釜石の街なかを見てお話しを聞く
- 昼 青葉公園復興商店街
- 午後 根浜・宝来館 ~ 平田仮設
- ミーティング・虎舞・タコあげ
- 大槌には行けず



● スタッフ・お客さん・じんじん 現場にいた人がみんなそれぞれの「また会えたという喜び」を持っている。再会の場という意味がとでも強かった。

● お茶碗とお茶席を楽しむ初対面のお客さん同士も報告し合っている方がとても多い

● 「なくなった・こわれた」お茶碗を作りに来た方も

● 下見に行くまでの迷い
「下見に行くっておいと... やらない」... それは、ない。
下見に行くということは、「かりに行く」ということだ...
...と思おうとした。

● 街を見てお話しを聞く ... とにかくそれ

● 復興商店街で野点可能は可能... というプランだが... としか思えない。

● 喫茶店のおはちゃん仮設の湿気の話

● 「野点の現場」と「今日」の前の釜石の風景、まったくつながらないまま1泊2日(実質1日)の滞在が終る。シヨックのみで固まっている

● 「下見に行くということは現場やるということ」だったが「野点をやるという実感」セ・ロのまま終了。

● かすかな手がかりは「タコあげ」の若者達を復興ミーティングで一瞬お会いした大槌から来た阿部さんの「大槌には、こんな(野点する)やれちゃいますよ」みたいなもの)好きな人多い。... という言葉だけ。

継続的に あつきあいしてきた土地ならではのこ

8月の最初の下見から本番10月までの3ヶ月でもすごいスピードで仙台の街の様子は変化。いろいろなギャップもさらに大きくなっているように感じた。

- 西口方面と東口方面のこと
- 被災の軽・重に関する個人の思い
- 震災成金という言葉があること
- ハチニコの話をよく聞いた
- ハコダテの話

個人と(生活と)深くむすびついた風景をいろんな方々と一緒に見て話して... が野点のスタート。

この土地のどんな風景を見ながらお茶を飲みたいですか? ときく... が野点のスタート。

それができないと釜石で(勝手に)思った。

喜怒哀楽どんな感情でもここにあり地べたや風景に対して感情が動いている人が多い土地こそ「ええ土地・懐の深い街」と思っていたし、今現在もそう思っている。

釜石の「ひどい」風景を見た時に僕は勝手に釜石の人達は「外の風景なんて見たくないはず」と「釜石の人達の風景への思い・感情の動きを1つの方向に限定して〈被災地・被災者〉というワケに囲い込んだ」一瞬で、そうだった。

12月 ~ 2012年1月

- 東京谷中で 熊倉さん + おかて + ミーティング
- 熊倉さん + おかて + 畑さんが
コーディネーターという形で関わること
- 東京芸大音響 熊倉セミの学生も関わること

2/16(木)・17(金) 初めての 大槌下見

- ひょうたん塾のこと説明を受ける
- 車でまわる 城山 ~ 街中 ~ 須賀町
~ 木のこハウス・仮設住宅 ~ 吉里吉里海岸
- 公民館でミーティング
 - 大槌でひょうたん塾の実践プログラムとして行うという方向
 - 現時点で釜石は未定ということ
 - 場所探しを地元の方で行うという方向
 - 本番の日程 など
- 大念寺さんに立ち寄り、遺骨におまいりさせていただく

3月

- 大槌で野点を行うこと正式に決定
- ひょうたん塾の実践プログラムという位置付け

4月 ~ 5月

- 予算・日程の検討
- コーディネーターチーム 大槌訪問
- 説明会・場所探し散歩
運営スタッフ募集のチラシ制作
など

- 阿部さんの「かれますよ」の言葉と釜石の青葉商店街で
若い子がうろろしてるのを見た時の感覚
- 年末に名取から京都に来た一時避難生活をしている
友人と話した時の感覚
- 「被災地 たがら やる」・「被災地 たがら やらない」
..... どちらも変だ。どちら
もラベルだけの判断。
- 「釜石の人は風景なんて見たくないはず」という
勝手に貼ったラベルがはがれ始める。
- 今度は「もしやるとしたらどこでやるのか。場所の
相談に乗って下さい」と
伝える..... と決めて、
腹が決まる。初めて「野点をやる」と

- 大萱生みかこさんの「失
なれた・記憶の中の風景も
大切な大槌の風景。失なれた
風景も見ながら場所探し
風景について話ながら、今の大槌
やってみていいことだ」と思う
・相談するんであれば それは
かも.....」
もうすぐ一年、そういう時期
- 「お茶、ここののは大槌の人の大切な日常で、文化。
お茶、この日ということ野
点とやるのもいいのでは...」
(じんじんの記憶の中で再構成)
これが 決定打。

- 須賀町エリアの湧水
ツアーに参加した
コーディネーターチーム
より興奮の報告あり
城山の話も聞く。

- チラシ制作はむずかしかった。

ちと「ちゃんとうかつな判断をしなくちゃ」と思い始める。
「なんにもおかつておえたる」とちゃんと言おれなまも
思い始める。..... これは、つまり、野点をしに行く時の
態度。

人けの少ない釜石で見た印象に残っている風景は
「子供達が集まっているトレカ屋さん」「復興商店街の喫茶店」
「タコあげフロリダの若者達と商店街の方のたどたどしい
やりとりの様子」
人がうろろしていること、それが続くこと。

自分自身も含めて
「全然おかつてないようなもんであれ」
「よ〜くおかつてるボランティアの人であれ」
「旅行の人であれ・お仕事の人であれ」
とにかく、たくさんの方が被災地(と呼ばれる地域)を
訪れ続けて
地元の人に喜ばれたり、怒られたりする方がええ
..... とこの頃から思い始める。(今も、より強く思う)

やっと、ついに「被災地 大槌・釜石」が
〇〇さんと〇〇さんと〇〇さんが住んでる街になり、
風景も具体的になり始める。

野点の準備のプロセスは
また見ぬ(これから会う)〇〇さん・〇〇さんを
迎えるための「ものすごく具体的な作業」
たと思ってる。
大槌でもそのスタートラインに立った。



場所探し～スタッフ募集～場所決定～体験説明会まで

6/2(土)～5(火) 第1回説明会・場所探し散歩

6/2 ○大植入り・ミーティング

6/3・4
○午前中説明会
○午後場所探し散歩
○夜ミーティング

6/5 ○少し散歩・ミーティング・大植を出る

●大植言うても広うござんすの話
●場所決める時のバランスの話が出た

●桜木町の方々との出会い
●お茶石宛に興味 ●場所のバランスへの不安

●城山での話 ●御社地へ須賀町へ駅まわり
●須賀町から小鏡川方向と振り返って見る大植の町
●小枕のこと 江岸寺のこと ●公民館の夜のこと
●寺野の学校まわり ●筋山・新山
●D-13の話 ●安渡小と大植稲荷
●桜木町の話 ●北小・シヤケの川の話

●浪板観光ホテル ●赤浜小とひょうたん島と住宅跡の花
●吉里吉里第4仮設 ●海洋研前の海とひょうたん島
●吉里吉里吉祥ま・APE ●浪板海岸
●もりがまどのお茶席 ●金沢の仮設・大勝院

●。。。またまた。。。
○記憶と重ね合わせながら風景を見るということ
○楽しい話の場所かともつらい話の場所であること
○もっともっとゆくりでないとお話を聞けない感覚
○「被災地としての大植」だけじゃない
「美しいええ風景見て、おいしいものたべてほしい」
○吉里吉里・浪板時間、切札の無念

●桜木町の方々との御縁のこと
●それでも大植は海と暮らす町だから赤浜エリアで
●湧水・須賀町・御社地・駅まわりをまた人が歩いている風景を見たいし、来てほしい
しぼり込む「方向」はスムース(?)に定まる。

仮設住まいの方と在宅の方の距離の話
仮設間のバランス・平等性の話
地域間のバランスの話
震災によってそれぞれの関係性やコミュニティがバラバラになってしまったこと
震災によってそれ以前にもあったミゾが広がってしまったこと

お茶石宛とお茶、この話だけは最初から越境していた

それぞれのものすごい量・深さの思いはかり

大念寺さんが会場であったことの重要性
きりぎり色んな方に来ていただけ

一回目のお散歩の直後は
失った風景・今の風景 それに関して地元の方から話されること(と話されないこと)の重さ(と言っているのか?)に一瞬、場所を選び・決めるなんてやはり無理か?とも思う。

今の街の状況で「ある場所で何かを行う」ということが、イコール「街のこの先のランドデザインに関する立場表明」になりかねないという重さ、.....の話も出た。

地元の方の場所に関する意見を人質にとらずに場所を決めなくちゃいけない。
誰かを勝手に「地元の人代表」にしてはいけない。
じんじん、ひょうたん塾・コートネートチームが最後は胸をくっつけて決めて.....交渉をスタートする.....
.....ここからがえっちらあっちら





8/17(金)~20(月) 第3回説明会・場所探し散歩

8/17 ○大植入り・ミーティング・千原たまたまの話

- 8/18-19-20 ○午前中は説明会
- 午後はしほり込まれた場所を決定するための最終現場確認
- あいさつまわり
- 場所決定のミーティング
- 千原決定のミーティング

9/17(?) ○コーディネーターチーム 火田 先乗り大植入り

9/24(月) ○コーディネーターチーム 渡辺 大植入り

- 9/25(火) ○じんじん大植入り
- 体験説明会～初日の助っ人となる東京のスタッフ(多くは芸大熊倉かみ生)も大植入り
- 仕込み作業

9/26(水) **スタッフ体験説明会**
北小福幸商店街キヨリバス前



● 散歩・場所の方向 決定まではOK.
いざ 具体的な交渉・お願い・やりとり……の困難

● 地元事務局・一緒に実現に動いている方々からの色々な「むずかしさ」にまつわる反応・お話し

- 「時間がかかるとなると半年後なにかいいのにならぬか?」
- 「誰のためにやっているのか?」
- 「これは住民の差込み型なの? ちがうの?」
- 「誰が決定するのか?」
- 「団体間の交渉への復讐」

● 「手渡したい千原を楽しみながら」作業ない状況

● 吉里吉里第4仮設前Pの使用に関してのやりとり。赤浜を最終的にどんな形で実施するか…の最大のポイントだった(と今思う)。

● 桜木町の町会へのごあいさつ・説明

● 初めての方も含め地元の方たくさん

● 東京からの学生スタッフと大植の方の初対面があったことの重要性

● 「お茶碗に入っている」方がたくさんいて安心した

● 商店街の方への宣伝・あいさつを当日も行ったからたがえるこまごまの時間はなかった

● 「作業を通して緊張とこおほりがゆるりとけていく」

● 北小でゆ〜っくりやれてよかった

じんじん & コーディネーターチームもまた「地元の方々にどこまで・何を依頼するの?」を(もう思い切りお世話になってしまっているおかげで)ちょっとずつ・ちょっとずつ更新しながら手さぐりのやりとりを続けていたように思う

「被災地の方々への「思いほかりお見合い状態」から「〇〇さん・〇〇さん、がうちよりお世話になります」「〇〇さん・〇〇さん一緒にどうですか?」へ少しずつ重くなって来た(はあ?・フモリ?)けど「そこそこ」に聞ける それぞれの「経験に基づく感度の違い・考え方の違い」はむずかしいことですが、でも、当然のむずかしさ。

「作業」がポイントになる。「作業でしか越境できないという予感」はあった。体験説明会がとっても重要と確信

「現場のええ風景」を参加者が想像できる体験説明会だった。この日 ええお天気だったことはとても重要なことだった。

本番期間 9/27 ~ 10/1

9/27 (木)

- 常楽院 おそうじ
- 吉里吉里第4仮設 全戸あいさつまわり
- 周辺住宅 あいさつまわり
岡本酒店さん あいさつ
- 初日(9/29)に向けてミーティング
- 仕込み作業

9/28 (金)

- 赤浜 あいさつまわり
- 仕込み作業
- ミーティング

9/29 (土)

赤浜野点本番

- ・ 常楽院前 は 野点とカフェ雑貨 alua
- ・ 吉里吉里第4仮設前 [P]にはお茶席
- ・ 常楽院内は ひょこりひょうたん島上映
- ・ 岡本酒店前には info
- ・ 赤浜小学校庭は [P]と筋山ツアー
- ・ 搬入時小雨 ~ 午後からは晴天

9/30 (日)

- 片づけ
- 10/3に向けてミーティング

10/1 (月)

- 榎木園児童公園 おそうじ・水はけ
- あいさつまわり
- 仕込み作業
- ミーティング

● 木彫りのおちゃん ● 既に知っている人多し
● ロックンロール仮設

● 岡本さん お茶たてる気マンマン
● 留守宅多し

● 「赤浜言うてもなう ごぞんす」の話

● ウキとくれたおちゃん
● 海の絵付け・青の色味についての話
● お茶席で海の話をする人・しない人
● 「お茶あん」のすごい働き(含さら・笑)
● 「お茶あんをみかく作業」のすごい働き
● Apeのリカカーがあつてよかった!!の話
● 「赤浜はあまり人が来なく...なかつた」のこと
● 終了後のちろりん村のおばちゃんの話

● 後日「赤浜が一番ゆくり・多くの地元の方々と現場を共にした気がする」というスタッフ感想あり
● 当日スタッフ感想の中に「野点は(か?)野点たつた」というものあり

● あいさつまわり不十分の感覚・時間切れの感覚
● 路向こうで焼きもの好きのおばちゃんとお会う
● 小籠包仮設まで行けず

あいさつまわりこそダイコロ味

あいさつまわりと「平等(と呼ばれるもの)」について

うっかり あいさつまわりをするために来ました

「被災者」「仮設」から〇〇さん・〇〇のおちゃんへ

誰かを「被災者代表」にしてしまわないこと
「被災者(と呼ばれる人)(という呼び名)」を心の中で人質にしないこと

その時・その時に「具体的」であること

「作業」と「お茶碗」が一番越境していた

「野点は(か?)野点たつた」という感想が...
とつても心に残っているのはなぜか?

「野点」か「被災地や被災者という名前・囲い」と
少しでも越境できた...と思いたいのたつらう。
どうたつたのか?



10/2 (火) (○仕込み作業・LP充填
○ミーティング)

10/3 (水) 桜木町野点本番

- 野点・お茶、この席・お団子屋さん
- お弁当屋さん・よみきかせ
- 服の回収箱・ハモニカライブ など
- 終日降ったり止んだり〜本降りにはならず

10/4 (木) (○片づけ
○10/7に向けてミーティング)

10/5 (金) (○大槌駅前そうじ
○現場の位置確認
○おーみんさんあいさつ
○ミーティング
○仕込み作業)

10/6 (土) (○仕込み作業
○マストなどでの千うし西どり
○ミーティング)

10/7 (日) 大槌駅前野点本番

- 野点・カフェAPE・カフェ alua
- 移動図書館・お茶、この席
- 湧水散歩・新山ツアー
- ライブ(ワケコロレニス・Stand Wave・劇)
- 仙山野点スタッフのグッズ販売+宣伝ブース
- くもり時々晴れ

- お茶、ニ大盛況
- ハモニカがすばらしかったこと
- 日本一周の男子・信楽での御縁など遠来の方
- 作業服のおにいさん
- 「やはり、またまたお茶おんのすごい働き(笑)」
- 小鎚仮設・路向こうからのお客さんほどのくらいおられたのか?の話
- 茶ちゃんを愛でながらのええお茶席がたくさんあったこと

●JR駅前のこと

●もっともっと千うし西どりしたかった

- ちょっと忙しすぎで風景をよく見れなかった(笑)
- 桜木町の方々が駅前まで来てくれたこと
- 赤浜の方々が駅前まで来てくれたこと
- APE・alua・移動図書館・お茶、この席の場がすごくよかった(野点はバタバタしすぎた気がする)
- 駅周辺・須賀町周辺に住んでおられた方々はどうか?
- この日も海の色・青の色の話多し「浪板のうみ」のお茶碗

疑いのマナコがお茶ちゃんと作業によって変わってゆく野点のダイコノ味

桜木町の方々とゆくり出会い・現場を行えたことと
路向こうまで(あらゆる意味で)行けなかった無念。

土地柄とっていいのか(?)
震災と関連があるのか(?)
「作業」「ふるまひの背後にある作業の厚み」の重要性、それがないと、ちゃんと出会えない
……という感覚をずっと期間中抱いていたこと

とにかく、ほんま作業好き(見るでも・やるでも)な方が多かったのは事実

何もなくなってしまった駅前に「来てもらった」人が集い・歩いていた
何らかの「心の中の地図の書き換え」はおこったのか?

最初からたくさんの方が来ていたので
じんじん個人は大槌駅前では、あまりお客さんとゆくりは出会えなかった。
他の場をそれぞれはどうだったのか?



Photo by Ayaka Umeda

10/8 (日・祝)・9(火)

- 片づけ ○仙台向け仕込み作業
- 打ちあけ
- いろんなタイミングで小さなミーティング

10/10 (水) ○大槌をはなれ 仙台へ

- 赤浜・桜木・町方 あいさつまわり (時間全く足りない)。
- お茶碗の話をしてる方多し
- 市民文化祭での 展示という嬉しい提案もあり

- 事務局の方々の 終了後ミーティングでの話
 - 「ゆくり進んでいく」ことに関してそれぞれ共有できていた部分とできていなかった部分
 - 「コ-ディネ-ター? ファシリテ-ター?」どんなプロセスで誰が決めるのが共有できていた部分とできていなかった部分

野点後、お茶碗を愛でながら
もっとゆ〜っくり色々な方とお話かしたかった。

こんなに茶碗が活躍した野点は初めてかも。
しれない。焼きものやってよかった(笑)

ひょうたん塾の今後について
何かを誘発できたのだろうか?

その他、とっても重要(僕にとって)なこと

「まあ、あれだな。ありがた迷惑。なんだけどな」
 「なんか、こうイラッとすんだよな」
 「う〜ん、まあなあ……しゃ〜ね〜な」
 (須賀町から小槌川方向を見ながら)
 「来た人には必ずここから、この角度から大槌の町を
 見てほしいんだあ」
 僕にとっての指針となる言葉でした

「被災地・被災者」「地元の人・外の人」
 「被災」という意味で囲われて(心の中で)しまった風景
 それらと越境したかった(しないと立てられなかった)
 のは僕自身である。……ということ

行きたかった

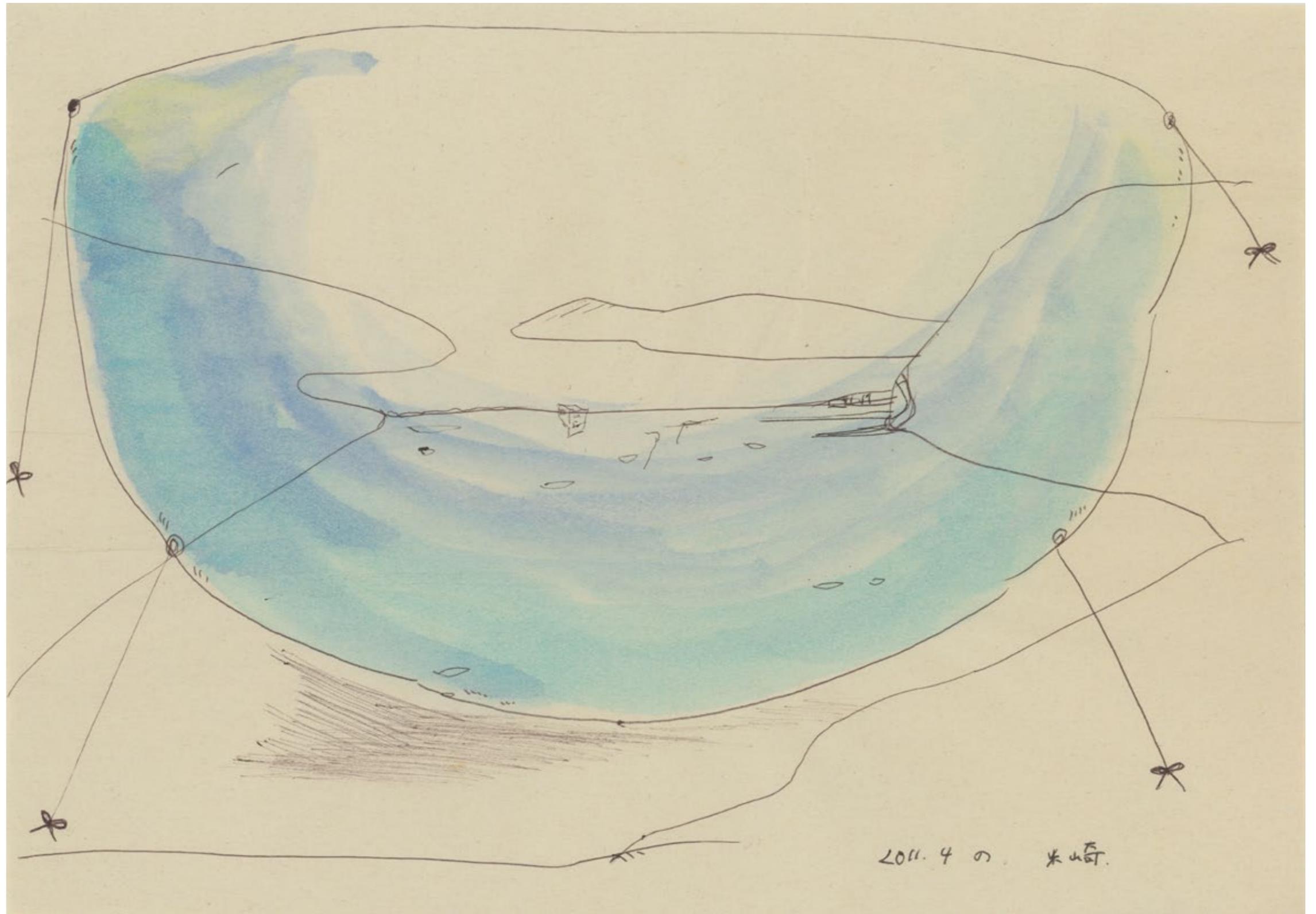
野点やりたかった

「ないもの(人・もの・風景)」をこまごま感じ、思いながら
風景を見たのは初めてだと思ふ

どんな立場の人であれ
(自分も含めて)行き続ける人が増えたらいい

さみしさという媒介についての試論

瀬尾夏美



《4月のさみしさ》
素材：紙、ボールペン、
水彩絵の具(182×257mm)
2011年

なんだろう、ここにある
とにかく巨大な体積をもったさみしさは

2012年の初めに発表した『Kさんの話していたことと、さみしさについて』という作品の冒頭の一節である。テキストとドローイングからなるこの作品のなかで、私は陸前高田に現れた巨大な“さみしさ”について記述している。それは、見渡す限りの空間を埋めるほどに大きく膨れた、薄青く透けたビニールのようなもので、四辺から紐のようなものが垂れていて、すぐ下の地面と結ばれている。この“さみしさ”が時間の経過とともに大きさや形を変えながら、いかにこの土地に存在し続けるかを描こうとした。

この作品をつくってからたった7年ほどの話ではあるけれど、振り返ってみれば、現在につながる私の作品制作や場づくりのすべてが、冒頭の言葉から始まっているのだろうと思えるし、これからもそうである、という予感がある。私は旅に出るたびに“さみしさ”に出会い、心を惹かれ、何かできまいかと頭をひねり、じたばたと手を動かしてきたと思う。それにもかかわらず、今まで特別言葉にしたことがなかったためか、やっかいな相棒である“さみしさ”が一体何者なのか、未だによくわからないでいる。そろそろ向き合わなきゃならない時期かなと思っていたところにこの場をいただいたので、書くことを通して何かの手触りを掴んでいければと思う。

目撃してしまった“さみしさ”

まずはじめに、“さみしさ”に触れたいと思っ

たきっかけを詳述してみる。冒頭の言葉に出会った2011年4月。大津波に洗われた沿岸のまちを訪ね歩いて数日目、岩手県陸前高田市を初めて訪れた日のこと。

友人のついで、Kさんというおばあさんに出会った。彼女の家は高台にあって難を逃れたけれど、たくさんのご近所さんや親戚が被災したのだという。彼女は、「すべて失くした」と言って、津波に洗われた広い地面とその先にある海を指さした。曇り空の下、夕暮れに向かって重い青色に染まっていく風景は、私には少し怖いものに見えた。Kさんは、自身の体験や近い人たちの境遇について早口で訴えながら、同時に、ここにあったものたちがいかにうつくしかったかを断片的に語っているように思われた。私は、それを見てみたかったなと思いながら、もう決して見られないのだろうということを考えていた。別れ際の「ありがとうね、復興したらまた来てくださいね」という彼女の言葉に、ここにあったものが二度と戻らないまま、このまちがあたらしい像を結んでいこうとしていることが想像されたし、彼女が、「初めてこのまちを訪れる相手とは共有できないことがたくさんある」という諦めのようなものを抱いているようにも感じられた。私は、面と向かっているひとりのおばあさんの身体のなかに確かにある、そのうつくしい像を見ることができない。とても大切なものが物理的に失われたが、個人の記憶の浅瀬にはまだ確かにあって、しかし目の前の人間とすらそれは共有され得ないし、それ以前に共有したいかどうかよくわからない。ということに両者が気づいているから、会話はそれ以上親密なものにはならなかった。

どうにも身動きの取れないもどかしさと、互いが互いを守るために抱く諦めに出くわして、私は、Kさんとの会話の弾みを嬉しく思いながらも、身体の芯がひんやりとするような“さみしさ”を感じていた。

見渡せば、重い青色の、広い風景。猛烈に語ったKさんの声が耳に残っていて、彼女の言葉の断片が繰り返される。なぜ、あんなにたくさん語ってくれたのだろう。それなのに、なぜ距離は遠いのだろう。本当は何が語りたかったのだろう。一見がらんどうに見えるけれど、のびのびと手を伸ばすことが憚られるようなどんよりとした空を眺めながら、大津波はたくさんものを持って行って、その引き換えに、このまち全体を覆うほどの大きな“さみしさ”を置いていったのではないかと想像してみる。“さみしさ”はきっと、さまざまなものたちが互いに引きあい、結合して、できている。

人、家、財産、コミュニティ、風景……無数のものを物理的に喪失した“さみしさ”。そして、伝わらない／伝えられないことへの“さみしさ”。私とKさんの間に生まれた、背景を共有していないがために強く現れる諦めもそのひとつだろう。けれどそれよりも、大津波によって、近い人たちの間に明らかな境界線が引かれてしまったことによる“語れなさ”の方が深刻なように思われた。生き残った人、死んだ人。家が残った人、失った人。目に見える境遇の違いが生まれたことによって、口に出すのも憚られることが無数に現れたのだ。このことについては、前述の会話のなかで、Kさん自身が語ってくれていた。「私もいっぱい友達亡くしてしまったの。でも

津波の後はね、涙も何にも出なくなってしまう。それでもこのごろやっとな落ち着いたら、あーって悲しみが出てくんの。して、なんで私が生き残っちゃったのかなあって、思うの。(中略)でも、うちはこうしてね、水も出るし電気も出るから、みなさんに却って申し訳ないくらいなの」

この数日の間で、津波に洗われた村々で聞いたいくつものつぶやきが思い出される。たくさん大切なものたちが壊されて、とてもつらい。けれど、家を流されたり家族を失ったりした人がいるから、それを口に出すことは憚られる。まして、突然の苦しみで末に亡くなった人たちの気持ちはどんなものだろう。

戸惑いながら、沈黙の隙間を縫うように、密やかに編まれる言葉の断片。告白すれば、それ自体にとっても惹かれるものがあつた。彼らの言葉は、いつも別の誰かの存在を背負っていた。だからこそ、饒舌には語れない。近い人にさえ自分の気持ちや戸惑いを伝えられないし、相手のことをわかりたい、という気持ちを持つことさえ畏れ多い。そして反対に、相手が自分の心情をわかろうとする所作を察知すると反射的に拒否してしまう。大変なものを見た、でも、誰も言葉を発することができない。すぐ近くにいるのに、そこにあるのに触れられない。触れて欲しいけど欲しくない。その間でかっちりと編まれていく沈黙をどうすることもできない。身体は確かに隣にあるのに、さみしい。

ああそうか、と思った。不意に、私もこれを持っている、ということに気がついた。私の日常にも“さみしさ”は現れる。きっと、誰しもにある。例えば、慣れ親しんだ風景が消えた時。隣にいる人と決して通じ合えないと悟った時。“さ

みしさ”はふと日常にあらわれ、身体の芯をぐつと締め付ける。いま目の前にあるものは、それらと本質的に同じものではないのか。そう思った時、私のなかにあるそれと、この大きな“さみしさ”の一部が馴染み、分ち難く結びついているように感じられた。ここで何が起きたのか、おばあさんが、出会った人たちが、何を語れないのかはわからない。けれど、“さみしい”という感覚は私も持っていて、誰かが抱えるそれを少しは想像することができる。その気づきは、不思議と私をほっとさせた。

特別な体験をした特別な場所で私が出会ったのは、私たちが日常的に付き合っているごく身近な感覚だった。未曾有の災害が起きたけれども、そこにいるのは紛れもなく人で、出来事の後も容赦なく続いていく暮らしがあり、そこで起きる手触りのある問題のあれこれは、“さみしい”という感覚が導いてくるもののように思われた。さまざまな感情や複雑に絡まった問題があるのだろうけれど、いまここで生きている人の困りごとは、もしかすると、この巨大な“さみしさ”をどうするのか、という類のものではないだろうか。

ちょうどいい大きさだったなら、暮らしの相棒として付き合えるけれども、今日の前にあるそれは見たこともないほどに大きくて、複雑で、ここにいる人たちだけでは抱えきれなさそうに見える。だからこの場所には、とにかく、もう少し人が必要だ。傷にはむやみに触れないほうがいい。けれど、彼らが瞬間的に抱えた痛みの体験は、いまにも彼らの身体を突き破ってしまいそうだ。生き残った人たち同士も、旅人でさえもそれに気づいているのに、膨張した

さみしさの圧によって、誰もが口をつぐんでしまう。さあ、どうしよう。目撃してしまった“さみしさ”を、どのようにして、もう少し多くの人たちで分ち持つことができるだろう。持たせてもらえるのだろう。

しっかりと巻き込まれた

そんな風にして、私はこの問いを持ち帰ることになった。そして、現在までずっとそれを抱え、旅をし、手を動かし続けている、ということになる。7年あまりの間にさまざまな実践をしていたが、私はこの問いを、「いかに^{まち}路をつくるか」ということに読みかえている。局所に寄ってしまったさみしさを、別の場所へと流していく路をつくる。路づくりは、いかに媒介するかという問題でもあって、それはアートの仕事であると気がついた。そして、私がやることは作品をつくることだとシンプルに思った。

とは言え、何をすることも当初思っていたよりずっと時間がかかり、前述の、2011年4月に出くわした緊急性の高い事柄に対して何かできたかという、まったくそんなわけもない。医療や社会福祉、災害ボランティア、まちづくりなど、さまざまな人がさまざまな立場で傷ついた土地を訪れ、着々と仕事をしていた。私があ頃何をしてたかといえば、しっかりと巻き込まれた、ということくらいだ。今は、アートがいかに遅いかということを感じながらも、それ自体が仕事なのだと思っている。

結局のところ、2012年から3年間、私は陸前高田というまちに暮らしていた。「なぜそんなに」と思うかもしれないけれど、あの巨大

な“さみしさ”を目撃してしまったのだから仕方ないのだと思う。そして、シンプルにこのまちで出会った人たちの言葉や立ち上がっていく風景に惹かれていた。なぜこのまちを選んだのかと問われて、恥ずかしげもなく「恋のようなもの」と答えたこともあるくらいで、それ以上でも以下でもないのだと思っている。

ぼんやりとしている私を尻目に、まちは、人は、見る間に変わっていった。私はせめてそれを忘れないようにと、横でひたすらメモをした。特に目を奪われたのは、被災したまちに現れる吊いの作法だった。ある人は、広い草はらのようになったまちの跡に、その人が確かに生きたその場所に、通い、花を手向け続ける。ある人は、「集落すべてを吊いたい」と巨大な花畑をつくり、その土地に触れ続ける。死者を吊う行為を通して、未曾有の災害のその後、自分たちの風景と物語を立ち上げていくその手つきは、とても尊く、私はいつでもそれに見惚れていた。吊いは、彼らが自らの手でつくる鮮やかな路でもあった。死者へと花を手向けることで、「ここにその人がいた」ということを示していた。通りすがりの人がそれを見つけて立ち止まり、手を合わせる。一輪の花が、亡くなった人たちの抱えた“さみしさ”を、他の誰かに渡していくための道筋となる。

ある夕暮れに、流れたまちの一角につくり上げられた花畑がうつくしく光っているのを見て足が止まった。花の手入れをしていたおばちゃんが、私に気づいて軽い会釈してくれる。通りがかりのよそ者を、夫婦で営むプレハブの店舗に招き入れて、ここにいた人たちのことや、ここにあったもののことを^{とつとつ}話して

くれた。おばちゃんに花畑の片隅へと導かれて、ここに住んでいた人がつくったという小さな祭壇の前に立つ。手を合わせる。そして、「また来ます」と言って別れた。私はこの時、ここに暮らそうとした理由をはっきりと自覚し直した。私は、この花畑をつくる人たち、死者とともに生きようとする人たちに話を聞きたかったのだ。このまちで初めて出会ったKさんも、そうだったではないか。

未曾有の出来事に触れる回路

振り返ってみる。あの時目の前にあった巨大な“さみしさ”を放っておきたくないと思ったのは、それこそが未曾有の出来事に触れる回路であると感じたからではないだろうか。「さみしさなら私も持っている」と気づいた時の安堵感がチクリと刺さる。私は、テレビのニュースで繰り返し見つめていた未曾有の出来事について、少しでも、体感的にわかりたかったのだと思う。得体の知れない怖さだけが膨れ上がるのを、なんとか食い止めたかったのだ。臆病だからこそ、その場に行かなくてはならなかった。そして、そのものに対峙している人たちに会って、何かを聞きたかった。出会ってみると、彼らは“さみしさ”を抱える普通の人であった。けれども、素手で、見渡す限りの荒野に暮らしを立てていこうとしていた。死者、生者、幾重にも重なる関係性の^{ひだ}襲の間で口をつぐみながらも、日々の吊いのなかで、死者とともに生きる作法までもをつくりあげる。そんな彼らの存在の分厚さに、私は驚き、懂れた。

私は自分の乱暴さによく気づいて、心

底ほっとしていた。自分のやりたいこと、やら
ずにはいられないことを開示することで、やっ
と大切な人たちと話を始めることができると思っ
た。彼らが触れようとしているものと私が触れ
ようとしているものは、そもそも違うものなのだ。
だからこそ、役割分担ができるような気がした
し、もしかすれば、一緒に何かをつくることだっ
てできるのかもしれない。私は作品をつくるこ
とを通して、得体の知れないものだらけの日々を、
彼らとともに、そして誰かとともに、生き抜いて
いけるような仕掛けをつくりたい。そして、自
分の浅はかな欲望のありかを精確に自覚する
ことは、この場所に居させてもらう上での、せ
めても誠実さのような気もした。

どうしようもない私の欲望を最初に見破った
のは、勤めていた仮設の写真館の店主であった。
「お前が絵を描くなら、文章を書くなら、このま
ちの住人になるなよ。距離を取れ。青いもの
をただ青く描くな。ちゃんと見ろよ、そこに色
はあるぞ。居たいだけここに居ていいんだ。そ
の代わりいつか描けよ。そして、見えた色を俺
に見せろ」

今はもういない店主の言葉は、いつだって身
体のなかで響いている。

話をよりよく聞ける身体

話を戻す。おばちゃんは、花畑をつくる理
由について、こう語っていた。
「人通りのなくなったこの場所をただ見ているのは、
さみしいでしょ。このまちの人はここを見捨て
たのかって思われるのは悔しくて。それに何よ
りも、亡くなった方たちを放っておくことは、私

にはできない」

被災から少しの時間が経ち、彼女は弔いを
通して、形のない存在を一時的に象れるよう
になってはいたが、それでもまだ彼女自身は“さ
みしさ”の渦中にあるように見えた。彼女の“さ
みしさ”を分かち持つ路をつくるには、私は一
体何をしたらいいだろう。まだはっきりとはわ
からない。とにかく私は、話を聞くことを続け
ようと思った。それならば、話をよりよく聞け
る身体が欲しい。そう思って、彼女との会話に
出てくる場所を繰り返し歩き、写真を撮り、資
料を読み込み、スケッチに起こした。

結論から言えば、私の7年あまりの実践の
ほとんどは、“話を聞く”という行為であった。
被災地域で行うものもそうでないものも、どこ
にいても、それは変わらない。会話を結ぶこと
によって、誰かの身体のなかにある体験やイ
メージが外に現れてくる。私はそれを聞くこと
で、その一部を自分の身体に招き入れるのだ。
とても簡単なやりとりだが、相手の身体のなか
にあったものを、私の身体に少しだけでも移
動させることができる。そして私は、聞いた話
を作品にすることを通して、別の誰かに渡して
いく。誰かと出会うことも、作品をつくることも、
いつだって、自分の身体を回路の一部として
差し出すことからのみ始まった。

花畑に通うようになると、おばちゃんはいつ
も、物欲しそうな私に何かを話してくれた。「あ
んただから喋るのよ」と言って、近しいコミュ
ニティでは語れない話が出てくることもあった。
単純な私はそれを鵜呑みにして、「今まさに大
切なものを受けとってしまった」と舞い上がった。
と同時に、この人は私をうまく使ってくれる人

だということに気がつく。語れないことの要因
のひとつは、そこに聞き手がいないということ
だったりもするだろう。この人は、私を聞き手
として相手取ること、語られるべき言葉を自
分の外に現したのだ。語り手と聞き手という
協働関係を結び合いながら、語り手の身体
のなかにあった形のないもの、形を失ったもの
たちを、語りとして象って、互いの間に置いていく。
ふとした表情や言葉の選び方で、相手がその
ことに自覚的であるとわかる時がある。話を
語ることのリスクを引き受けながら、緊張関係
を崩すことのないように、慎重に、でも身軽に、
語り手は話す。聞いた話を受け止めながら、そ
して同時に取り溢しながら、私は相槌を打つ。
秘密にも似た語りを、両者が同時に見つけた
時には、互いの“さみしさ”が和らぐのを感じ
たりもする。また、時には、それまでのすべて
を忘れてしまったかのように、「あんたは何し
に来たの」などという問いに晒されることもある。
戸惑う私の答えを待つ丸い目に、相手が何枚
も上手であることを悟れば、「敵わないです」「で
も、それが知りたい」と答えてみる。ふたりで
目を合わせて、「ふふふ」と笑ってしまう。そこ
から始まる語りもある。

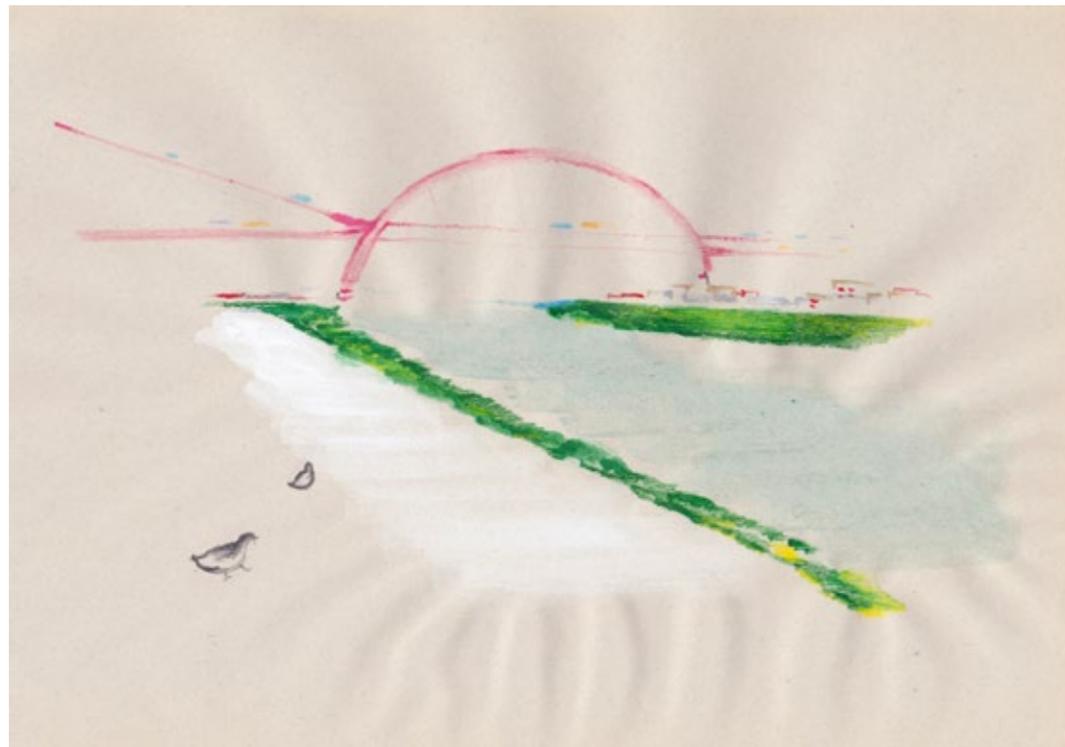
つまるところ、“聞く”“語る”というこの単
純な往復が、誰かの持つ感情や体験を分かち
持つための路をつくる時にとても有効である、
と私は考える。そして、話を聞いて、あるいは
風景を見て、その一部を受け取った時、次にそ
れを渡す方法としても、語り、聞いてもらう、と
いう方法は有効である。しかし、欲深い私は、
受け取ったそれをできるだけ遠くに飛ばしたい
と考える。物語や絵にしたり、展覧会という場

をつくったり、当人を含むもっと遠くに飛ばせ
る人たちと協働するという手法を用いて、渡し
ていく。気をつけるのは、“聞く”“語る”とい
う場に生まれる密度や緊張関係を失わないよ
うにすること。早口に、饒舌にならないよう
にすること。これを間違えると、聞いた話も、知
りたかったことも、そして多くの語り手も、聞き
手の上滑りを察知して一気に立ち去ってしまう
のだ。その瞬間は、本当にさみしい。

大きくゆるやかな循環

自身の持つ“さみしさ”という感覚を媒介に
して、人は他者の境遇を、心情を、想像するこ
とができるのだろうと私は思う。“さみしさ”は
そのために、誰しにも備えられたのかもしれな
いとさえ思うのだ。その移入は時に煩わしくも
あるけれど、自分の身体も大きくゆるやかな循
環の一部だと思ってみると、いつか自分のそ
れが抱えきれないほどに膨れ上がったとしても、
どこかに受け取ってくれる人がいると想像でき
るようになるかもしれない。

“さみしさ”とどう付き合うか、それをひと
つの媒介としていかに他者と出会うのか。そ
の問いを持つことは、何か小さな希望のような
ものを、ひとつ携えて歩くことに似ている。だ
から私はかろうじて、こうして歩いているのだ
と思う。さあ、今日も、自分のなかの“さみしさ”
が惹かれる場所へ。



《荒川土手と鳩》素材：紙、色鉛筆、アクリル絵の具(182×257mm) 2017年

旅についての連載をすることになって、書きたい土地をさまざま思い浮かべながら、最後は“ふるさと”について考えられたらよいなあ、きっとそうなるだろうなあと思っていた。旅をするということは、どこかから出かけることでもあるだろうと考え、その出発点となる“どこか”こそがふるさともかもしれないと思ったりする。けれどそれは私にとって一体どこで、その場所を本当に“ふるさと”と呼ぶだろうか、などと考えはじめると、思考はすんなりとは取まらなかった。生まれも育ちも東京の私にとって“ふるさと”は、あの川べりにある特徴のない住宅街のはずだけれど、どうにもそれが面白くなかったのかもしれない。ふるさとは、もっと圧倒的な風景を持ってほしい。そんなちっぽけな願いがあったのかもしれない。

東北を訪れるようになってから、誰にも“ふるさと”があることを当然のように、あまりにも当たり前のように

に語れる人が多くいることを実感した。特に、震災で多くのものがなくなった陸前高田では、“ふるさと”という言葉が失われたもの自体を指すこともあったし、これから関わらなくてはならない、守らなければならない大切な土地として語られることもあった。「ふるさとは、遠きにありて思うもの」かと思っていたが、この土地で暮らす人たちにとっては、足もとにある地面やぐりぐりと見渡した先にいる顔の見える人びと、その背後にある風景、つまり、自分の暮らしとびったりくっついている環境こそがふるさとであった。そしてそれはいつも、どこか煩わしくも愛おしいものとして語られる。

岩手県に居を移し、陸前高田でほとんどの時間を過ごすようになると「ふるさとはどこ？」と訪ねられる機会が増えた。私はその度に「東京出身で、ふるさとかあまり考えたことがないですね」と歯切れの悪い返事をした。東京出身と答えた時、多くの場合それ以上に詮索されることはない。どこか別の地名を言

えば「ああ、〇〇が有名なところだね」とか「山の方なんだね」と言ったように、その土地土地の特性が述べられたりするのだが、東京にはその特性が語られにくい。それはおそらく私自身が出身地についてうまく語れないことにもつながっていて、ちいさなコンプレックスのようにもなっていた。遡れば美術大学にいた頃も、自分と関わりの深い土地について語り、そこから作品をつくっている人たちが羨しかった。東京のありふれたような住宅街で育った私には、そうやって他者に語れる物語がなかった。自発的な表現を実践していく場、またその評価が行われる場としての美術大学と言う環境では、自分から語りたいたい物語がないことが大きな弱点のようにも思われた。

陸前高田に通うようになって私自身が非常に救われたのは、この場所には聞かれるべき言葉と眺められるべき風景がたくさんあるということだった。大津波によって当事者とそうでない人が分別され、壊れた風景のなかにうつくしさを見出すことは憚られた。そのような環境には、何かまことしやかに存在している様子の“隔たり”を越えていくような行為が必要だと感じていた。さまざまなメディアを使いながらそれを実践することは、アートが本質的に担ってきた仕事でもあるだろう。語れる物語を持たない私は、誰かに聞かせてもらった大切な話を次の誰かに渡していく、媒介になるような仕事なら出来るのかもしれないと思った。見渡せば、似ているように見えるために気に留められなかったもの、放っておけば衝突してしまい兼ねないものたちなど、災厄の有無にとらわれずとも、日常とは異なったつながり方や出会い方をするだけで光が見えてきそうなものごとがたくさんある。そして、媒介することを自分の役割と捉えた時、今まで四苦八苦しながら扱ってきた色や言葉が、誰かや風景の持つ物語によって、するすると導きだされて、目の前に形を現しはじめることにも気がついた。それは私にとって、自発的な物語を縁取っていくことよりもずっと軽やかで、遠くへと跳べてしまうような経験であった。そんな出会いがあってから、私はずっと、誰かや

風景の持つ物語を聞かせてもらって、それを自らの身体で語り直すような仕事をしている、と思う。

その過程で、民話に出会った。ずっと昔、何かがかきかけで編まれたお話は、たくさんの人びとの身体を通じて語られ、聞かれ、また語られながら、いま現在に伝わってきている。時に語り手は、自分の身の上話や、聞いてほしくてうまく話せなかったことなどを、語って聞かせるお話に込めることもあっただろう。例えば、一見同じ『笠地蔵』のお話に思われても、時代や場所によって細部が変わっていることもある。そうやってひとつのお話が、さまざまな時間や空間のなかに点在するひとりひとりによって使われていき、同時に継承の営みとしてしたたかに機能していく。どこかで起きたあるひとつの事象は、物語という抽象化を



《キッチン》2009年



《クッション》2008年

経ることで、経験者自身やその土地固有の出来事に留まらず、いくつもの身体を通じ、長い時間と距離を渡っていく。そして、そうあってさえも、お話の芯はそうそう変わらない。それは、このお話を語り継いできた大きな営みに対して、語り手が常に敬意を持ちながら語っていくからなのだと思う。

民話語りのおじいさんは「話語れるって、しあわせなんだよ」とも教えてくれた。聞く人がいるから、語ることができる。目の前にいる人が私のために語ってくれて、語ってもらったからこそ、今度は誰かに語ることができる。それぞれの身体は、あるお話を語り継ぐためのメディアのひとつである。しかし紛れもなく特別な、ひとつひとつの身体である。ふたりないし数人が同じ場に行われる、「聞く」「語る」というとてもささやかな行為が、気の遠くなるほどの広がりを持っていることに息をのむ。

民話という営みに出会った時、私がやりたかったのは、こういうことかもしれないなと思った。同時に、「誰かの話を受け取り、語り直す」という行為からは、どうしようもなく語り手の身体があらわになることも感じた。話を聞かせてくれる人が「こう聞いてほしい」と考えて語っていたとしても、私は聞く行為のなかで誤読をしてしまうし、語り直す際にも私の身体を持っている癖がどうしても出てくる。そのまま受け渡せないということが、「聞く」「語る」ことの面白さではあるが、媒介することを作家としての仕事と捉える時には、自分の身体をよく理解している必要があると思った。

さて、話は戻る。語れる物語を持っていなかったはずの私は、誰かの話を聞くことで、自分の身体に染み付いた物語に気づかされることになる。どこまでが自分の輪郭なのかわからずに、母親さえも自分の一部だと思っていた赤ん坊が、何かを契機に、母親が他人であると強烈に理解するようなもので、私は、誰かの話を聞くことで“わからないこと”の存在を、語り直すことで“伝わらないこと”の存在を痛感し、やっと自分の身体の輪郭を理解し始める(はっきり言っ

てそれまではさらに幼い思考で生きていたということなので、ずいぶん恥ずかしくなる)。東京という場所、さらには歴史の浅い(ように捉えられがち)住宅街のような場所に生まれ育つこと自体が、“誰しもが持っているはずの固有の物語を自覚する契機が少ない”という特徴を持ちあわせているのではないかと……と、言ういい訳もここに記しておく。

私の身体やその所作をひとつひとつ見ていけば、東京にある、あのありふれた住宅街も、祖父母と同居していたが今は核家族の実家も、そこで営まれていた生活習慣も言葉も、私を構成する大きな要素だということがわかってくる。自分を構成する物語が結びつく場所をふるさとと呼ぶとしたら、あの場所は紛れもなく私の“ふるさと”であるのだろう。うつくしい風景やわかりやすい歴史のないあの場所を“ふるさと”と呼ぶことにどこかつまらなさを感じながらも、私がしていく仕事にとってはそれが意外と有為なことであると捉えられれば、すこし気に入ってくる。現金なものだ。

もうひとつ、私が“ふるさと”を捉えていくうえで、とても大切な出来事があった。それは昨年、障害を持った人たちの表現活動をまなざしていく仕事が無い込んできたことだった。この仕事きたことは偶然なのだが、私には障害を持った兄弟がいる。彼とは年齢が離れているために兄弟らしく関わることもできず、かと言って落ち着いた距離を保って手を差し伸べることもできず、そのことがいつも引っかかっていた。そんな折、突然目の前に差し出してもらった仕事を通して、さまざまな障害を持った人たちのつくっている絵や彫刻をたくさん見せてもらった。そして、その作者に会いにいくと、彼らのほとんどが、驚くほどにやさしかった。例えば、いわゆる言葉を持っていない人が何かを伝えようとしてくれていても、私にはわからないことが度々あって、あたふたと戸惑ってしまうことがあった。そんな時その人は、「わからなくてもいいよ」ということを、その佇まいで伝えてくれた。いくつかの福祉施設やご自宅を訪問させていただく

なかで、障害を持った人の多くが、“わからない”“伝わらない”ということの不自由さをよく知っていて、それでも相手と関わろうとすること、そのための技術の工夫を惜しまないこと、そして、それらの豊かさを楽しむことを実践されているのではないかと感じられてきた。その身体の尊さに対峙するにつけ、自分の至らなさが恥ずかしくもなりながら。そんな経験を通して、私は間接的に、自分の兄弟を理解していくようだった。そして近い将来(どこかで後回しにしているとも思えて気が引けるけれど)、必ず彼自身に向き合うのだと考えると、彼のいるその場所こそが、私にとっての“ふるさと”だという定義もあると思われてくる。私には、負わなくてはならないもの、というよりも、負いたいものがある、それは特別でもないし、重たくもない。そのこと自体が、私を歩かせてくれる。ただ深い感謝がある。

情けなくも、“わからない”“伝わらない”ことに対して無自覚な時間が長かった私は、これからも、それを深く深く知っている人たちに、いろいろなことを教えてもらいに通いたいと思っている。「お邪魔します」と緊張しつつ、彼らのやさしさにはきつと敵わないと感じながら。そして、その頭のどこか片隅でいつも、“ふるさと”を想ってしまうだろう。

さて、そろそろ結びたいと思う。あれこれと考えていると、“ふるさと”とは郷愁のために引用されるものではなく、どうしても未来的な存在であるように思えてならない。それはつまり、出発する地点がすなわち帰ってくる地点でもある、ということに尽きるのかもしれない。必ずその場所に帰るかはいったん置いておきながら、毎日のように帰ることもあるのだろうとも思いながら。



(お葬式) 2008年

“ふるさと”が持つ物語がどんなにちっぽけなものでも、それにはどうしても敵いそうにないし、反対に訪ねる先がどんなに大きな物語を持っていたとしても、私はそれを描けてしまうくらい軽やかさを保ってしまうだろう。

旅人的であることの無情を思いながら、だからこそ仕事ができるのだ、とも思う。私はこれからもきっと、多くの時間を旅に使っていく。それが私にとっての仕事の仕方であって、暮らしを紡ぐ芯となる。いつかどこかに定住して、家庭をつくることもあるかもしれないけれど、それもきっと旅の過程にあるのではないかな、なんて予感もしている。旅することはどこかで“ふるさと”のことを考え続けることでもあるのだろう。暮らしていくなかで、ふるさととの距離は伸縮するのだろうし、定義が変わることもあるとも思う。まあ、そんなことはまだよくわからないけれど、それもまた旅の醍醐味なのだろうか。ともかく私は歩いてみよう。やっと“ふるさと”を見つけたから、これでまた、遠くに行ける。

*本原稿は、Art Bridge InstituteのWEB連載「BRIDGE STORY」の「旅するからだ: ことばと絵をつくる 05 ふるさと」に一部加筆・修正をして再録したものです。
<http://a-b-i.info/story/member/seo>



そこは植物がとも生い茂っていて、
 残された家の基礎や道路など地面に属する
 あらゆるものに覆いかぶさって、一面緑色だった。
 鳥の声も街中で聞くものより多く、大きく感じた。
 秩序が破壊されて全てのものが
 自然の中に帰っていかのように見える土地のなかに、
 漁師が自力で再建した小屋や誰かが供えた花や、
 鳥居や、無人の野菜販売ボックスが、
 男性が1人自力で工事して作り上げ運営している
 スケーターのためのパークなどが点在している。
 そんな土地が、駅周辺に新しく作られている
 新興住宅地と遠浅の海に挟まれた状態で漂っている。
 その地理とそれぞれの構造物から感じているエネルギーと、
 早景色の色と見晴らしの良さが印象的だった。

村上慧

8年目の荒浜を歩く

仙台市若林区荒浜。仙台の人にとっては、夏になると「深沼海水浴場」に行った馴染み深い場所です。
 貞山堀にかかる橋を渡り、赤い一本道を通って松林を抜けると、白い砂浜と青い海がぱっと目の前に広がる。
 海と田畑のあいだで緑のイグネ(屋久根)*に囲まれた家々があり、半農半漁の暮らしが営まれていた集落。
 しかしながら、津波によってそのほとんどが流されてしまいました。

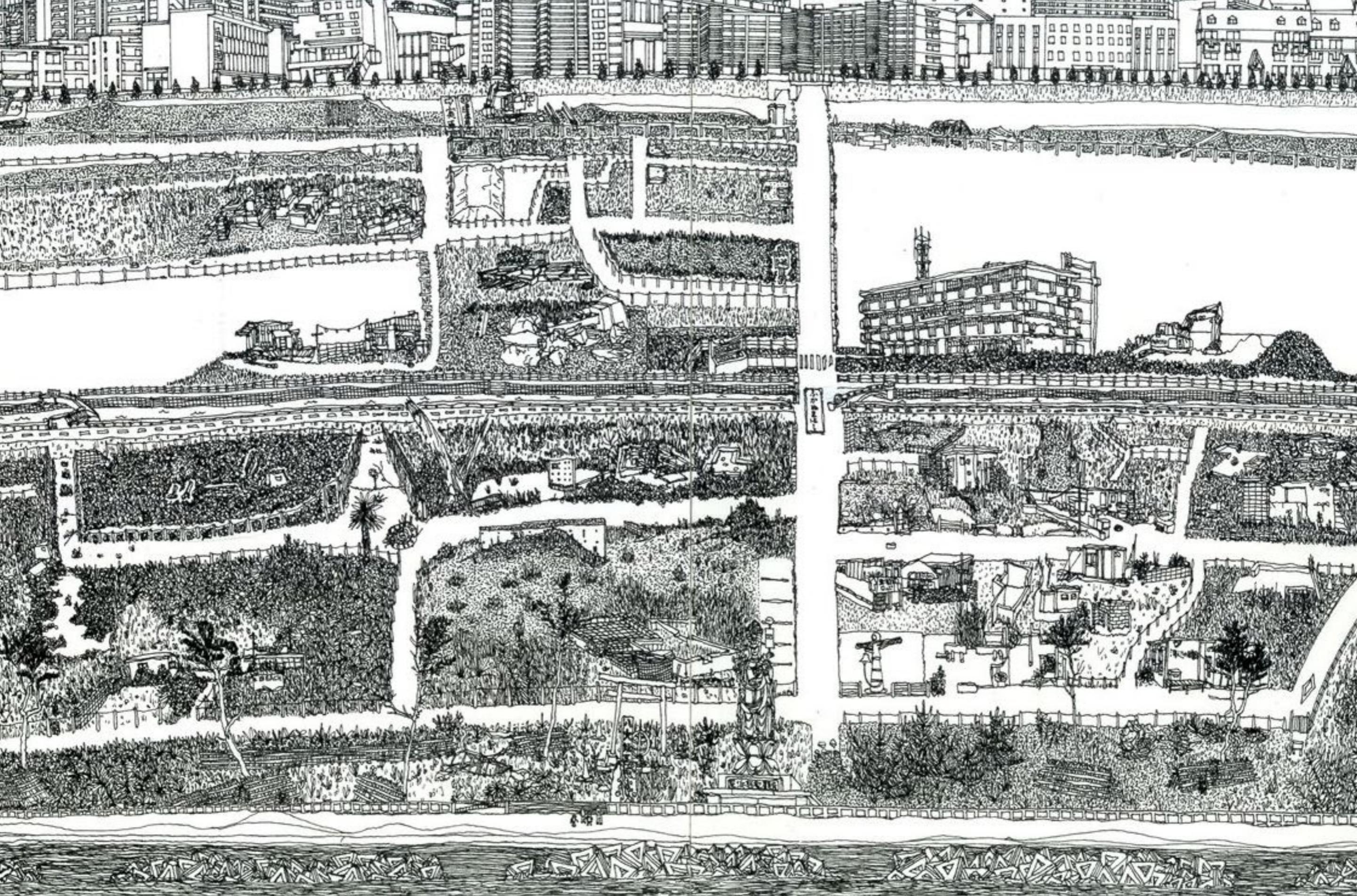
2018年3月に集団移転跡地利活用の事業候補が決まり、これからどんどん風景が変わっていくでしょう。
 いま目の前にある痕跡はいつまであるかわかりません。

2018年6月20日、小雨の降るなか、アーティストの村上慧さんと荒浜を歩きました。

*かつて仙台藩では有用樹木の植林を奨励しており、家を守る屋敷林として竹や杉、ケヤキ、栗などの木々が植えられていた。防風や防雪、防霜の役割もあったという。

P.52 ドローイング | 村上慧(荒浜) 素材: ケント紙、顔料インク(385×257mm) 2018年





くり返し、 くり返し 訪ねる

「RE:プロジェクト」座談会

構成 | 川村庸子
写真 | 越後谷 出 (P.54)

東日本大震災で津波被害の大きかった仙台市沿岸部の記憶を集め、「ここにあった確かな暮らし」を記録してきたRE:プロジェクト*。市の震災復興計画に則り、震災に関するさまざまな取り組みが5年を目処に終了するなか、事業終了後もかたちを変えながら活動を続けていらっやいます。

今回は、田澤紘子さん(公益財団法人仙台市市民文化事業団 せんだい3.11メモリアル交流館 交流係にしのおたちめ/左)と西大立目祥子さん(フリーライター/右)に、聞き書きを通して感じてきたことについて伺いました。

*RE:プロジェクト
荒浜を含む、仙台市沿岸部の12の集落を訪ね、聞き書きをまとめたフリーペーパー「RE:プロジェクト通信」[5年目のRE:プロジェクト通信]を20号制作し、記録展などを開催。プロジェクトメンバーは、田澤さん、西大立目さん、詩人の武田こうじさん。主催は、仙台市と公益財団法人仙台市市民文化事業団。2011年度から5カ年に渡り、復興支援ではなく、仙台市創造都市推進事業の一環として行われた。

土地に手をかける生き方

——「RE:プロジェクト通信 記録集」(2018年3月11日発行)に掲載されていた事業立ち上げの企画書に「被災した地域の記憶をつないでいく」「失われてしまった“目に見えないもの”の可視化を図る」と明確に書かれてあって、驚きました。「地域に軸足を置いて、くり返し、くり返し、今を丁寧に見ていくこと。それは、将来どんな街にしていきたいか希望を語ることにつながる」とも。

田澤 | 自分でもよくあの時期に書いたなって思いますが(笑)、ぶれずにやってこられたかなと思います。危機感があったんでしょうね。

と言うのも、わたしは震災前にこの仙台市沿岸部に行ったことがなくて、2011年4月に初めて訪れたとき、正直、がれきまみれで悲惨だとしか思えなかったんです。でもその足で避難所に行くと、住民の方から戻りたいという話をきくわけですよね。何であんな大変なところに、って思うけれど、よそ者には見えないだけなんです。だからこの土地で育まれてきた暮らしの記憶をつないでいかないと、単なる「被災地」で終わってしまうなと思ったんです。それに、ゆくゆくはここからいろんな表現が出てくるだろうと思ったときに、生活文化の記録が表現者の下支えになって欲しいという思いがありました。

西大立目 | わたしはもともと地域の記録誌をつくる活動を手伝うためにこの辺りに通っていて、年配の方の話をきくことが多かったのですが、記憶っていうのは、自分を再生していくときにもすごく大事なも

のになるなと思っているんです。記憶がなくなると自分が自分であることがわからなくなってしまう。風景が変わったとしても、この場所にこういうことがあったっていう記憶をもう一度その土地に住む方々に返すっていう作業は、地域再生のための何かにもなるんじゃないかと感じてきました。

暮らしって細部を積み上げて成り立っているから、「あなたの一番大事なものは何でしたか？」ってきかれても答えようがなくて、その総体すべてですよね。だから逆に、細部をきくことに意味があるんじゃないかなって思うんです。そこから浮かび上がってくる記憶の層のようなものが、これからほんとうに大事になってくるように思います。

——そうした「記憶の層」を感じたときのことを教えてくださいいただけますか？

田澤 | わたしは、それまで「被災地」というぼんやりしたイメージだったところから、だんだん暮らしが立ち上がっていく感じがありました。たとえば夏の過ごし方でも浜と内陸、貞山堀と名取川のどちらが近くにあるのかでも全然違うので、「仙台市沿岸部の被災地」なんて場所はないんですよね。

いま、次の企画展で鳥籠を取り上げようと思っているのですが、1950年まで、法律上鳥を自由に捕まえてもよかったので、かつての少年たちは、竹藪から竹を採って鳥籠をつくっていたんですよ。昨日、荒浜に暮らしていた豊さんにきいた話では、捕まえたヒワッコ(マヒワ)を鳥籠に入れて、鳴き声を競わせていたそうなんです。負けたらよりいい鳴き声の鳥を探して、飼ってる鳥と交換するというルール。だからそのとき自分が飼ってる鳥には愛着がないっていう(笑)。

——まるで『ポケモンGO』の走りですね(笑)。

田澤 | ほんとに。豊さんは西村さん家にあった竹林から竹ひごをつくっていたそうなのですが、ちょっと距離があるから「そんな遠くまで行かなくても」って言っ

たら、「いや、ニシムラの竹は質がいいんだ」と、商品名のように話していて(笑)。そうやっていい竹を取ってという視点で地域を見ているんだなあ。でも、軽犯罪法の制定によって小刀を持って遊びに出掛けることが難しくなったり、鳥獣保護法も1950年以降厳しくなって、2012年には鳥を捕まえるのが全面禁止になりました。だから、鳥籠の話ってきかないと話してもらえないんですね。豊さんが鳥籠をつくっていたのは70年以上前の話なのですが、こちらが尋ねると「ああ、そう言えば」ってする話し出して、竹の分布図なんかも頭に入っているんですよ。地域に根づいて暮らさってこういうことなんでしょうね。

西大立目 | 荒浜には漁師さんもいるのですが、津波のあとワタリガニが大豊漁なんですね。かつての100倍以上で、新聞にも取り上げられるくらい。だから漁を復活した吉男さんと話すと、「俺は幸せな男だ」って言うんですよ。「大豊漁で、笑いが止まらな



善男さん(右)は、荒浜で風土と向き合いながら専業で農業を営んできた。話をきいたのは、隣の宮城野区新浜で無農薬農業に取り組む源一郎さん(2015年11月) Photo by Hiroko Tazawa

いよ」って。全部流されてるのに。そういう海に生きてきた人たちのおおらかさって、すごいものだと思います。それも長いあいだに培われてきた気質なんだろうなって。

田澤 | この小さなエリアに、ほんとうにいろいろな生き方があるんですね。

西大立目 | 中心部から眺めると、ここは仙台の端っこになってしまいますが、それぞれ独自のネットワーク持っているんですね。「街場」ひとつとっても、北の七北田川河口近くで暮らしてきた人にとっては塩釜だし、南の藤塚の人にとっては閑上です。映画やパチンコに通い、花嫁さんの着付けも閑上でしてもらったとか。荒浜の人たちは西の仙台の街場まで野菜売りに出掛けたりして、生活を成り立たせていた。しかも、兼業が進んでいるとはいっても農業や漁業などの第一次産業がベースにあるなかで「ここは住

めないからあっちに移転して」って言われてもどうしても割切れなさがある。田んぼ一枚とっても、おじいさんが馬で耕していた記憶があって、その場所が被災したとはいえ目の前にあるわけですから。わたしは、聞き書きを通して「なぜ人はそこに住み続けるのか?」ということを知りたいと思うようになりました。病院やスーパーが近くて便利だという価値観とはまた違う暮らしがある。それは何なんだろうって。

田澤 | 復興という名の下に巨大な土木工事が進ん

でいくなかで、未だに土にふれて生活しているのは何とも不思議と言うか、これほど変わらない営みってあるんだろうかと思えますね。

専業農家だった昭男さんは震災後、避難所を経て娘さんのいるマンションに暮らしていたんですが、マンションの高い階で土にふれることができなくて、どんどん具合が悪くなっていったみたいなんです。それで結局また避難所に戻って、毎日のように自転車で自分の畑を見に行っている。長らく農業を営んでいたハツエさんも畑に行かないと「腹、カラカラになんねえんだ」と仰っていましたね。お腹がすかなくて、調子が悪いと。こういうことは市の復興政策の現場ではきこえてこない声で、いろんな分野できくべき声を「文化」でしか耳を傾けることができないというのは、正直憤りを感じます。

西大立目 | みなさん、畑があるからこの8年をやり過ごせたんですね。仮設住宅から通って、潮をかぶった畑土を掘り起こして、天地替えて新しい土を入れたりして、売る当てもないのに野菜を育てはじめて。そうやってしんどい時期を乗り越えてきた方は少なくありません。

田澤 | そうやって土地に手をかける感覚は年配の方だけではないんですね。スケートボードパーク『CDP』の貴田慎二さんは、震災直後から通い続けて、あの場所でスケボーをできるようにした。その想いって



昭男さんは、若林区三本塚に暮らす篤農家。震災後は「庭先で小さくやっている」と言いながら、その面積は広大だ。きき手のあいさんは、東京生まれの大学生(2015年6月) Photo by Hiroko Tazawa

何なんだろう。もしかしたらわたしにはちゃんと理解できる日はこないかもしれないけれど、そうやって成り立ってきた地域が、いま自分たちの手から離れようとしているわけですよね。それでも、こんなに辛い思いをしてでも住もうとするっていうのは理屈じゃない。

西大立目 | 土に触ってきた人たちは、これからも触り続けるだろうと思いますね。

震災は都市がどれだけ脆いかを教えてくれましたが、相変わらずオール電化の住宅を建てようとしているのを見ると、うーんと思ってしまいますね。いくらお金があっても買うものがなくて、物々交換でしのいだはずなのに。でも、また大阪も千葉も揺れたし、いつどこで何があるかわかりませんよね。今回、大津波の被害を受けた仙台市の沿岸部は、400年前にも大津波に遭っている場所なんですね。だからいつかまた来るっていうことだけは、みんなわかってきたんじゃないかなと思います。

暮らして細部を積み上げて成り立っているから、

「あなたの一番大事なものは何でしたか？」ってきかれても

答えようがなくて、その総体すべてですよ。

だから逆に、細部をきくことに意味があるんじゃないかなって思うんです。

——2017年4月に、2階まで津波が押し寄せた荒浜小学校が震災遺構になって、人の流れが変わったと思うのですが、おふたりはどんなふうに見てらっしゃるんですか？

田澤 | メモリアル交流館は荒井駅と直結しているし、すぐ近くに大変な思いをした方がいらっしゃることも考えて、リアルな物をなるべく展示しないようにしているのですが、人って、より悲惨なものを見たいっていう気持ちがあるようなんですね。なので、荒浜小学校が一般公開されてからはそちらに案内しています。ただ、小学校ってもともと地域の拠点だったわけですよ。だからそこを別の目的で使っちゃっていいのかなという思いもあるし、なんていうか「震災遺構」という看板がついてしまうと、被災地として見られ続けてしまうのではないかということに対する戸惑いもあります。

西大立目 | わたしは、定点としての意味合いが大きいかと思います。まわりは全部なくなっちゃっているし、たぶんこれからどんどん沿岸部は様変わりしていくと思うんですね。そのときに地域の拠点だった荒浜小学校が残っているっていうことに大きな意味がある。あの校舎で学んだ人たちが海を眺めながら、こんなことがあったね、あんなことがあったねと思わせる場所があるというのはかけがえのないことです。いまはまだあの辺りを歩いていても、まだ住宅の基礎が残っていたり、お風呂場のタイルが落ちていたりして、かつてここに人が暮らしていた

ということを感じ取れるけれど、それがいつまでであるかわかりませんから。

ことばにならない想い

——くり返し荒浜を訪ねてこられて、震災から8年目で感じることはありますか？

西大立目 | ことばを飲み込んでの方がたくさんいらっしゃるなど感じます。ほんとは地域みんなで移転したかったのにばらばらになってしまったとか。避難所を5カ所転々として、小さなお家を建てて落ち着いたように見えるけれど、「ここに来てから誰とも話さなくなった」って仰って、いまも毎日お家があった場所を見に行っている方もいる。

みんなあれから8歳年を取ってるわけですよ。だんだん身体も弱ってくるし、むしろことばにならない想いみたいなものはどんどん溜まっていったるよに思います。それはちょっと拾わないといけない。

田澤 | そうですね。だんだん復興公営住宅に入居が決まったり、家を建てたりする人たちが増えていて、復興計画上はもうゴールした人たちなんですよ。でもやっぱりぼろぼろとやり切れなさみたいなものがこぼれてくるっていうか…。それこそ仮設住宅には5年間暮らしたわけですよ。その時間を「仮」とは言えないし、そこからまた知らない土地に引越すというのは相当なストレスだと思うんです。なので、やっぱり何かちょっと疲れてきてる感じはしますし、

一方で新しい暮らしに馴染んできている感じもある。このあいだあるおじいちゃんに、何気なしに「お変わりないですか？」と挨拶をしたら、「やっぱり変わったこともあるし、変わらなかったこともあるし、ほんとうにいろいろだ」って言われて、はっとしたんですよ。「元気です」という答えを期待している自分がいて、散々小さい物語が大事だと言っておきながら、結局大きい物語に回収させようとしているんだなって。そういう意味では、さまざまな思いを抱えた方々に会いに行くときの態度が、より問われてくるのだと思います。

西大立目 | いつの間にか避難の丘ができていたり、閑上のほうを見ても巨大なクレーンがいくつも立っていて、もう人が手をかけるレベルを遥かに越えたことが動いてる。それは復興の槌音なのかもしれないけれど、見たこともない風景が現れつつあって、よくわからないことばかりですね。かつては松林を抜けると海でしたが、いまは防潮堤ができています。「これがあるから安心だ」っていう方もいるし、「海が見えなくなって怖い」っていう漁師さんもうるし、大災害って住民の利害や気持ちの違いがすごく圧縮されたかたちであられるんだなと思いますね。

——ここできいた話が記録として残って伝わるというよりも、みなさんが聞き書きをしていた活動自体がすごく重要だったんだなと思いました。書き残したこと以上に受け取ったものが多いんだろうな。

西大立目 | そうですね。だからRE：プロジェクトは

せんだい3.11メモリアル交流館

宮城県仙台市若林区荒井字字形85-4
(地下鉄東西線荒井駅から)

展示や書籍、ワークショップなどを通じて、東日本大震災や地域の記憶を語り継いでいくための場所。2016年設立。津波によって大きな被害を受けた、仙台市東部沿岸地域への玄関口に位置する。

仕事としてお引き受けしていますが、一度切りにしないということは決めています。一番しんどいときに「話をきかせてくれ」って行って、それでも来ないなんてあんまりじゃないかって。そういう意味では、通うこと自体が相手にとって何か意味あるものになっていたらと思いますね。

地域を見るときいて、やっぱり人が入り口になるんですよ。藤塚に大津波が押し寄せたてきいて、真っ先に「渡辺さん大丈夫かな？」って思う。抽象的な地域じゃなくて、渡辺さんが住んでいる藤塚。そういう入り口をつくれたらいいなと思います。なかなか大変なんですけど。

田澤 | 先月からまた、わたしたちで聞き書き講座をはじめたんです。10名の方と聞き書きの相手をコーディネートして、はじめだけ一緒に行って、あとはがんばって。去年は1年間お休みしていたんですが、今年はまた取り組んでみようと思って。

やっていておもしろいのは、やりながらみなさん自分の目的がしっかりできていくんですよ。たとえば、介護してるお母さんと聞き書きをしている方との話を照らし合わせて考えるようになって、お母さんともちゃんと話すようになったとか、生まれが九州だから東北の暮らしを知りたいとのめり込んでくださったり。

西大立目 | 何も背負っているものもないし、お金もないので、ただ本音がきけたらいいなと思っています。復興プロセスのなかで、一体何を感じてらっしゃるのか。かつての生活だけじゃなくて、いまの話もきけたらなって。

2018年6月21日 せんだい3.11メモリアル交流館にて

震災遺構 仙台市立荒浜小学校

宮城県仙台市若林区荒井字新堀端32-1
(地下鉄東西線荒井駅から市営バスにて15分)

2011年3月11日、児童や教職員、地域住民ら320人が避難し、2階まで津波が押し寄せた荒浜小学校。被災した校舎のありのままの姿と展示によって、津波の威力や脅威を知ることができる震災遺構。

かもめマシーン 『俺が代』

KAC Performing Arts Program 2018 / Re-search
and Re-direction : かかわりの技法
2018年6月30日 京都芸術センター〈京都府京都市〉
作・演出 | 萩原雄太 出演 | 清水穂奈美
文 | 川村庸子 写真 | 前谷 開

一本の木が立っている。そのまわりには小さな池のように水が溜まっていて、上からぼたぼたと水滴がしたたる。そこにひとりの女性が静かにあられ、日本国憲法を暗唱し出した――。
女性は、日本国憲法以外にも、文部省が解説のために発行した『あたらしい憲法のはなし』や、“憲政の神様”と呼ばれた尾崎行雄の演説などを声に出す。その読み方はさまざまで、たどたどしく疑問調になったり、怒鳴ったり、ささやいたり、ラップ調のときもある。身体もそれに伴って、何かを探るようにくねらせたり、そろそろ歩いたり、力強く地面を踏みしめたりしながら、やがて水のなかに足を踏み入れる。主語は、いつの間にか「俺」になっていた。

ことばが声になってゆく

『俺が代』の初演は、2016年。ヨーロッパ公演も経て、今回はこれまでよりも「日本国民」というものに対する疑いを強く演出したという。印象的だったのは、「日本国民」ということばのあとに一呼吸置いてから「は」という助詞が発話されていたことだ。その一瞬の沈黙のあいだに、わたしたちは「日本国民」ということについて考え出してしまう、どんどん意味がわからなくなる。憲法に書かれた主語は、「日本国民」と「我々」の2種類。戸惑い、疑心、反発、憧れ、安堵…いくつかの感情を行き来しながら“我々が日本国民になっていくプロセス”が、役者の身体を通してさまざまに立ち上がっていた。

かもめマシーン主宰で演出家の萩原雄太さん(P.72)は、この作品をつくるにあたって、右派左派問わず憲

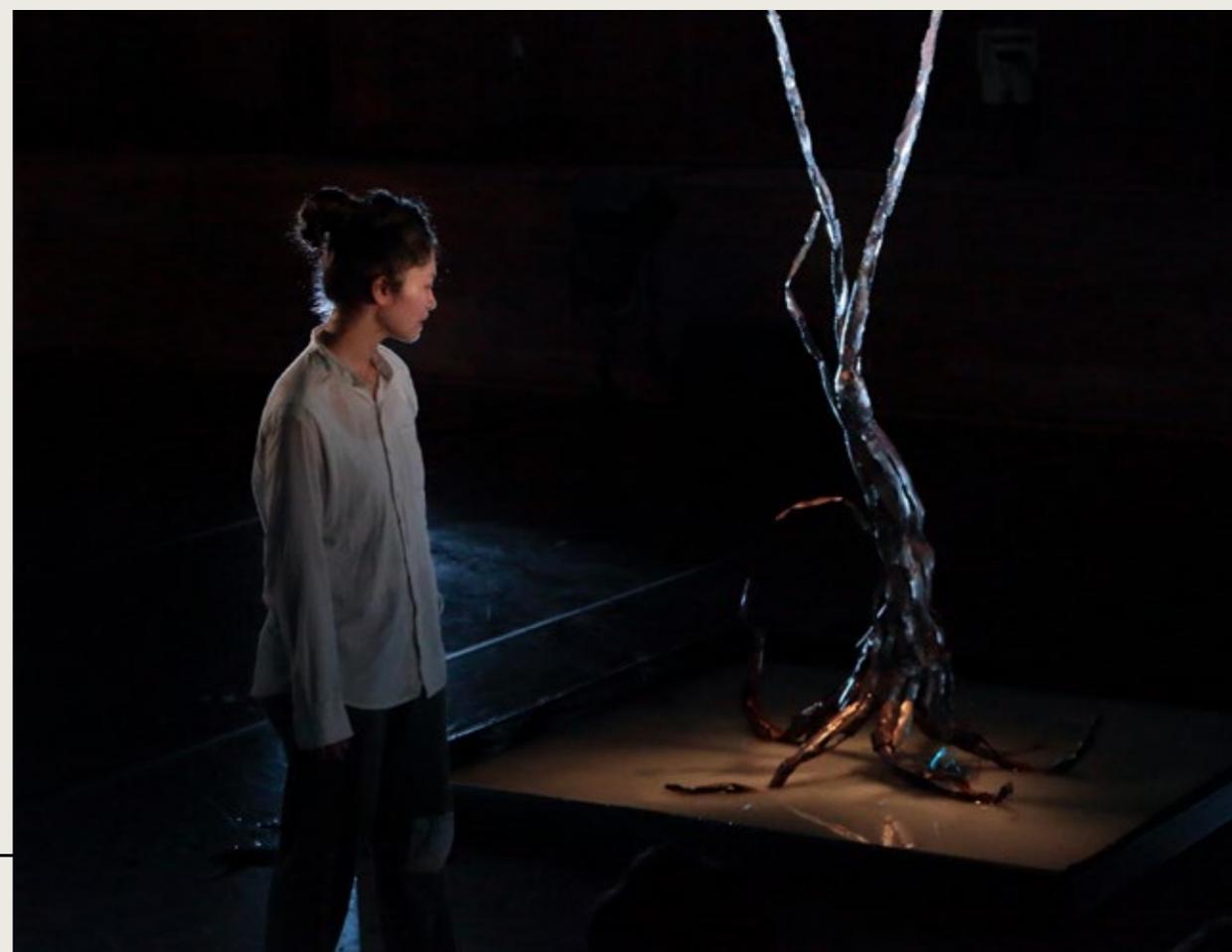
法に関する書籍を片っぱしから読み漁っては、役者の清水穂奈美さんと対話を行ったという。同じ資料を読んでも、イメージの立ち上がり方は異なる。「それは違うんじゃないか」と言い合いながら、一つひとつともにあるべき姿を探っていく。閣議の議事録を読むなかで、米の価格と憲法が同じ地平で議論されていて、当時の人々の生活の匂いを感じる瞬間があったそうだ。憲法という文字として書かれたことばが声になってゆく様に立ち合う。つまりそれは、思想や概念などが身体を通じて実態を伴ってゆくことであり、ふと、劇中に出てきた尾崎行雄の力強い演説を思い出す。

憲法で國が救はれるならば、世界に滅亡する國はありませぬ、良い憲法を作るとは洵に容易なことである、併し之を行ふことは非常に難しい(拍手)此の點を諸君に尋ねると同時に、私は顧みて己れにも尋ねなければならぬ程に心配を致して居ります(中略)
良いことを言うことは誰にでも出来るけれども、之を身に行ふことは非常に困難である
(国立国会図書館「帝国議会議録」衆議院本会議第35号より)

このとき尾崎は、くり返し表現変えながら、憲法を「行う」ことの意義を説いていた。1946年8月24日、敗戦後に憲法改正案を審議する衆議院本会議における演説である。

現実との距離を測るリサーチ

近年、リサーチを重視した作品は多い。日本国憲法となれば尚更だろう。制作を進めるなかで、萩原さんは



自身のリサーチ方法やその変化に気づいたという。そこには、東日本大震災をきっかけに制作した作品の影響があった。

2011年8月6日、かもめマシーン、福島県双葉郡広野町二ツ沼総合公園沿いの国道6号路上にて『福島でゴドーを待ちながら』の公演を行った。ろくに広報はしていない。どこからかきつけた観客がひとり。3名の役者はほとんど喋らずに、「ゴドー」と称する何かを待つ作品である。

初めは福島で暮らす人に演劇を観てもらったところで、それが何か意味を持つとは思えなかった。しかし演劇とは、必ずしも観客のために行わなくてもいいのかもしれない。その考えを後押ししてくれたのは、万人に向けてではなく、先祖や子孫、そして神様のために村々で執り行われる民俗芸能の存在だった。観客とは何か。この状況に肉薄するにはどうしたらいいのか。そうした思索の末、観客を「海外の人間、もしくは10年以上後の日本人」と定めて、福島で公演を行うことにした。

現地で演劇をするということは、自らを暴力的な存在であると認めた上で、どのようにその暴力性をコントロールするのかについて考えることでもある。それまでは集めた情報をいかに演劇に活かすかという作品に寄せた発想だったが、このとき「現実とオープンな状況で接する」ためのリサーチへと変化した。既にある現実に対して、あまりに勝手なことをしては距離が離れすぎてしまう。かといってべったりくっつきすぎてもおもしろくない。そもそも演劇を行う隙間はあるのだろうか？ 現実と演劇の距離を測り、演劇がいまの状況にどのように機能してゆくかを重んじるようになったそうだ。

「個々の作品がおもしろいかどうかは僕にとってはそんなに重要ではなくて、それがどのような議論を巻き起こすか、どんなふうはこの社会のなかに置かれるかということのほうがより大事だと思っています。もちろ

んおもしろさも重要なのですが、もうそれだけでは演劇を測れなくなってしまった」

演劇は、現実とはちょっと違う空間を立ち上げることができる。けれども、観客も役者も現実に生きていて、そこから極端に離れることはできない。それならば、「どのようにかわるか」ということに辿り着いた。



Photo by Takashi Fujii

演劇によって獲得した「わからなさ」

「基本的に、頭でわかってもしようがないと思っています、とにかく腑に落としたかったんです、この状況を。憲法や福島を扱っていると、思想的なメッセージがあるように誤解されるのですが、まずは腑に落とすところから始めたかった。それは、たとえば“ビートが腹にくる”ような単純で身体に響くこと。僕は、それができるこ

とが演劇の持つ一番すばらしい部分だと思っています」と萩原さんは語る。

そして、その演劇をつくるプロセスにおいてもかわり方を大事にしている。自分の足で歩いて、話をきく。菓子折を持って挨拶に行ったり、公共機関に使用許

ではないし、かつそこで完結するものでもない。そこから溢れ出ることによっていろいろな見方を変えてしまうことができるなんて、演劇ってやばいぞと。この演劇に対する“信心深さ”は、東日本大震災以降に強まったと思います」

演劇をつくることをきっかけに人と会うなかで、ささやかな発見がある。そのプロセスも含めて、「演劇」なのかもしれない。

彼らは、『福島でゴドーを待ちながら』の際に、制作の逡巡を綴ったテキストと出演者日記から成る冊子をつくっている。最後にこんなことが書かれていた。

この公演を経て獲得できたものは、福島でも原発でもなく、また新たな「わからなさ」だった。それに対しての回答を急ぐべきではないだろう。この国に暮らすのであれば、今後、数十年以上にわたって、この「わからなさ」に対して向き合っていかなければならない。

(かもめマシーン『福島でゴドーを待ちながら』冊子より)

わたしたちは、約7年後の今日も、かたちを変えながらまだこの「わからなさ」の只中にいる。それは、日本国憲法と向き合うときも根底に流れ続けている。

可をとったりする。

「演劇やアートだから、やっちゃえ！ と大義や勢いでやる方法もあるけれど、いちいち交渉して現実の状況と折り合いをつけていくことに魅力を感じます。全然かっこよくないけど、必要だなんて。

『福島でゴドーを待ちながら』をやってみて、演劇って実はすごい可能性を秘めたものなんじゃないかと思いました。演劇は劇場のなかだけで行われるもの

かもめマシーン

2007年、東京都にて設立。カンパニー名はアントン・チェーホフ『かもめ』とハイナー・ミュラー『ハムレットマシーン』の戯曲に由来し、個人的な身体と社会とのかわりに焦点を当てた作品を上演。また、「身体」を演劇の核となる要素として捉え、気功や太極拳などを応用し、独自の身体を開発している。2013年、第13回AAF戯曲賞受賞（愛知県文化振興事業団）、利賀演劇人コンクール2016 優秀演出家賞受賞。2017年、ルーマニアの国際演劇祭「Temps d'Image Festival」、2018年、『しあわせな日々』で「シアター・コモンズ'18」（ディレクター：相馬千秋）に参加。

中崎 透

『Like a Rolling Riceball』

プロジェクトFUKUSHIMA！ presents 清山飯坂温泉
 芸術祭(SIAF) 2018
 ～何の因果かラジウム玉子～
 2018年5月5日～6月3日(土日のみ開催)

文|嘉原 妙 写真|越後谷 出

「旅館が語りかけてくるみたいだった」
 そう言っていた人の言葉を思い出しながら、旅館清山をあとにした。背後ではまだ「ローリング ライスボール」と歌う女の人の声が微かにきこえる。いや、きこえたのではなくて、耳に残った声が静かに身体のなかで鳴り響いていたのかもしれない。

東日本大震災後、音楽フェスティバルや盆踊りなどの開催を中心に活動を展開してきたプロジェクトFUKUSHIMA！が、震災から7年後に『清山飯坂温泉芸術祭』を開催した。舞台は、福島のお座敷と呼ばれる飯坂温泉の外れにある旅館清山。これまでもプロジェクトの準備やイベント会場、スタッフが寝泊まりするなどして使ってきた場所だ。そしてここは、代表の山岸清之進さんの実家でもある。

旅館業は、2017年2月より施設の老朽化などの理由から休業している。家業を継がなかった山岸さんは、祖父母や両親との思い出のある実家をこれからどうしていくのか、自身の家族も含めて家族会議を重ねていたが、答えはそう簡単には出るものではない。「家族会議でどうにもこうにもならない話を、アーティストや友人たちと膝をつきあわせて話すような、そんな場になったらいいなと思って」と山岸さんは語っていた。

自分の実家を開く。それは、家族のことや割り切れない問題を開くことにほかならない。地縁・血縁という自分自身に張りついて離れない、少し面倒で、でもどこかで自分を支えている何かに向き合う行為でもある。

今回、これまで音楽を軸にパブリックな空間で活動を展開してきたプロジェクトFUKUSHIMA！が、山岸さんの実家というとてもパーソナルな場所を起点に、「FUKUSHIMAを生きる当事者たちの表現を模索」しようと試みた。それを最も体現していたのが、美術家・中崎透さん(P.72)の作品『Like a Rolling Riceball』である。



転がるにぎり飯を辿って

6月2日、温泉地独特の少し湿った空気ともう梅雨明けかと思わんばかりの日照りのなかを歩き、旅館清山の前に着いた。大きな赤い字で「清山」と書かれた門構えには、プロジェクトFUKUSHIMA！のシンボル「大風呂敷」でつくられた垂れ幕が掲げられていた。その下で誰かが煙草を燻らせているなと思ったら、中崎さん本人だった。「ようこそ！」と出迎えられる。さあさあと清山のなかに誘われた。最終週の芸術祭はとても賑わっていて、旅館の廊下では、やあやあと知り合いにもよく出くわした。

さて、一步、旅館のなかに足を踏み入ると、幾度にも増築を重ねた建物だということがよくわかる。階段を登ると、なぜここという場所に部屋があったり、廊下は迷路のように続き、枝葉のように部屋が連なっている。さらに、8,000平米の敷地内には、露天風呂やウォータースライダー、室内温水プール、戦争資料館、地下バーなどが広がり、あたかもレジャー施設のようなのだ。

受付で手渡された地図には旅館の全貌が描かれ、30組以上のアーティストの展示場所が記されていた。入口から順々に部屋を巡りながら、奥へと進む。廊下の壁紙が途中から杉林のような洋風の柄になったり、床が石畳になったりと、思いがけない空間の変化のなかを歩く度に、建物が纏う時代の空気を感じた。そうして辿り着いた旅館の奥に、『Like a Rolling Riceball』の入口があった。そこには、こう書かれていた。

最初にちょっとしたつくり話をしよう。
 むかしむかし、この土地を通りかかった旅の途中のお侍さんがいました。
 休憩をしようと腰を下ろし、にぎり飯を取り出すと、ポロリと転げ落ち、コロコロと坂を転がっていったとき。
 にぎり飯は湯気の湧き出る泉にポチャリ。
 この坂はしばらく「めし坂」と呼ばれ、それがいつの間にか「飯坂」の地名になった。

わたしの東北の風景

今号に参加してくださった方々にまなざしをわけていただきます。

震災後、東北でどのような経験をしましたか？

瀬尾夏美さん

東京都足立区生まれ、宮城県仙台市在住

草はらのようになった市街地の一角におばちゃんたちがつくった吊いの花畑は、開かれた“居場所”だった。そこは、離散してしまったかつての住民たち、ここで亡くなった人たち、いまは遠くにいる人たち、そして通りすがりの旅の人も、誰しもがともにいることができる稀有な場で、私も嬉しくてよく通った。やがて復興工事がやってきて花畑は解体せざるを得なくなった。おばちゃんたちは「復興の邪魔になることはしたくない」と言って、育てた花をどんどんと抜き、多くの人に分けていった。そんなある日の夕暮れ、ほとんどの花が抜かれた花畑に、祭壇が出来ているのを見つけた。中心に赤紫色のゆりがすくと立っていて、その足元にちいさなプランターが寄せられている。その様はうつくしいけれど、何かただ事ではないという感じで、私は息を飲んだ。後から聞けば、あれは、この集落に暮らしていたおばあさんに捧げた花だったのだという。内陸に避難していたおばあさんは、いつも戻りたいと言っていたから、みんなで待っていたのだという。しかし、とうとうここを通らなかったのだという。それからしばらくして、花畑があった場所は嵩上げ工事で埋められた。荒野を彩る花畑は、あのまちに施された死化粧だったのかもしれないと思う。



高田町森の前の花畑 (岩手県陸前高田市 / 2014年)

村上 慧さん

神奈川県相模原市生まれ、東京都葛飾区育ち、東京都三鷹市などに在住

2014年、アーティストの中村紋子さんに紹介してもらって岩手県大船渡市の越喜来という町で「潮目」という建物と、それを建てた「わいちさん」に出会った。わいちさんは建設業を生業にしている、お茶目で元気な最高のおっちゃん、震災後に仕事の合間をぬって、津波で流されてしまった土地の上に「潮目」をつくった。津波資料館とアスレチックを兼ねたカラフルで超カッコいいその建物には「越喜来 南区 復興拠点」という旗が掲げられていた。しびれた。ほかにも「津波で流された橋の復旧工事が先延ばしになっていて住民が面倒な思いをしている」と言って、丸太で橋をかけたり(「自己責任で渡ってください」という言葉と自分の電話番号が書かれた看板も立てていた)、「復興工事のダンプカーが歩行者と同じ道路を使っているせいで、もともとここにいた住人が危ない思いをして、交通事故も起こっている。そんな事故はひとつだって起きてはいけない」と意見したりしていて、「公共」という概念の真髄を見たと思った。僕がFacebookを退会してから連絡をとれずにいるのだけれど、また近々会いにいきたい。



潮目 (岩手県大船渡市三陸町越喜来 / 2014年)

萩原雄太さん

茨城県水戸市生まれ、東京都小金井市在住

東北に足を運ぶのをサボっている。よくないことかもしれないが、事実だからしょうがない。言い訳をする。震災から5ヶ月後の夏、コンビニも閉鎖したJ-ヴィレッジのすぐ近くに、1軒のラーメン屋が営業していた。それがひどくひどく奇妙に見えたのは、その周囲に時間が流れてなかったからだ。復旧作業のために、多くの車が通行していたし、警察車両もあった。けれども、その周囲を歩いても、奇妙なほど時間の流れを感じられない。止まったのか、淀んでいるのか、そんな時間の流れていない質感は、震災の後に見たどんな風景よりも「悲劇的」だった。翌年の夏、同じ場所に足を運び、周囲を歩いた。変わっていた。かつて、歩道にまで伸びていたセイタカアワダチソウは、全国どこにでもある国道のように刈り取られていた。ある種の「生气」のようなものが感じられ、淀んでいた時間は緩やかに流れはじめていた。さらに翌夏、同じ場所に行くと、そこには「普通」の時間がさらさらと流れていた。「普通」を、別の言葉で言い換えれば「日常」になる。「復興」という言葉は、建物ではなく時間の流れのことを指すのではないかな、と思った。それ以来、東北に足を運ぶのをサボっている。



ニッ沼総合公園横の国道6号 (2011年)

嘉原 妙 (編集部)

兵庫県宝塚市生まれ、東京都江東区在住

先日、初めて京都の福知山を訪れたとき、「水が漬く」ということばを耳にした。夕食をとろうとふらっと入ったお店で、あの場所はいつからあるんですか、と午後を訪れた真新しいお店が集まる場所について、何気なく尋ねたときのことだった。「あの辺りは以前、“水が漬いて” すっかり建物がダメになってしまっ。このお店の裏にも川が流れていて、数年前の大雨のときも川が氾濫するんじゃないかとときどきどきしたんです」しばらく彼女の話の聴きながら、だんだんとそれは水害に遭われて家屋が浸水したことを指すことばなのだ気づいた。そして、このまちの記憶の一端にふれてしまったと思った。それは、目が覚めるような不意打ちだった。

印象的な話がもうひとつある。彼女が車の助手席にお姉さんを乗せて舞鶴から綾部に帰る途中、姉妹揃って道に迷ったという話だ。その道は、川沿いの道だった。久しぶりに通るとはいえ、何度も通った馴染みの道で迷う。その話をきいた瞬間、3年前、釜石から大槌に向かう車の後部座席から見た情景が頭をよぎった。あの日、盛土工事によって新しい道路がつくられては変更され、知っている場所がどんどん知らない場所へと書き換えられていくなかで、わたしたちも同じように道に迷っていた。ハンドルを握りながら、「よく道に迷うんです」と言ったあの人の、淡々と、でもどこか割り切れないような表情の横顔が浮かんだ。川沿いの道は堤防工事が進み、すっかり風景が変わっていたらしい。そのことに気づかず、曲がるべきところを直進し、すっかり隣まちまで来たところでやっと気がついてね、と照れ笑いしながら話す彼女を見て、わたしはなんだか切なくて仕方がなかった。

そこに確かに存在していた「風景」は、そこで生きる人をひっそりと力強く支えていることを思い知る。支えを失ったその先に、わたしたちはどんな風景を重ねてゆけるのか。「東北の風景」は東北以外にもある。そんなことを思いながら、西から東へと帰ってきた。

編集後記

佐藤李青

非常時にアートは必要か。最近、東北の話をする機会があると、この問いを投げかけてきている。東日本大震災では、どうだったのか。各地の災害の報せにふれる度に、そう問われているように感じる。正直に言えば、はっきりと答えられる自信はない。だが、この問いに向き合っておくことは、きっと非常時を迎えたときに役に立つのだと思う。

問いの後には、続けて、ふたつの考え方を話す。ひとつは「非常時」と「平常時」に区別はあるのだろうか、ということ。平常時にアートは必要か。言い方は違っても、事実、震災以前からアートに関する仕事に携わるなかで個人の信念や職務上の意義を問い続けてきた人々は初動が早かった。もちろん、誰もが未曾有の出来事に右往左往していた。だが、それは揺るがないものをもつからこそ、目の前の出来事にしっかりと向き合った結果なのだと思う。

もうひとつは「非常時」の時間を長く考える、ということ。何かを必要だと実感するには実践をともにする時間が必要になる。表現によってはかたちになるタイミングも違う。前号で中崎透さんが震災直後の音楽家の迅速な動きに比べて、美術の「スピードの遅さ」に「ヤキモキ」したという言葉思い出す*1。その中崎さんが今年になってつくった美術作品は本号を象徴するものとなった。

この話をするとき、いつもきむらとしろうじんさんの姿が思い浮かぶ。むしろ、震災後のじんじんさんとの出会いから、こう語れるようになったというほうが正しいかもしれない。2012年から毎年開催してきた釜石と大槌の「野点」。2017年の現場を訪れたとき、何度も立ち合っていたはずの「野点」の真骨頂に初めてふれた気がした。どこからともなく「じんじんさ〜ん」と再会の声がきこえる。じんじんさんは中心にいるけれど、場を動かしているわけではない。仮設商店街が取り囲む駐車場の一角で、誰もが自分なりの「居方」で時を過ごしている。穏やかな現場に流れる静かな路上の運動性。震災後の野点の始まりを思い出し、時間をかけることの意義を実感したのは、このときだった*2。

特集に掲げた「表現の水脈」とは目に見える「現れ」の連関ではない。何かを表現しようとする態度の連鎖なのではないかと思う。時が経つことで目に見えるかたちで立ち現れることもあれば、さざ波のように誰かの表現を誘発することもあるだろう。見えるようになった頃には、その原因を追えないほどにほかの経験や出来事と溶け込んでいる。震災の後の表現とは「震災」を追うだけでは出会えないのかもしれない。その水脈をたどる作業は、現在の多様な語りのなかに刻印された震災の痕跡を拾い集めるようなものとなった。

そして、いまま変貌する風景のなかで、その在りようは変化し続けていくのだろう。

瀬尾夏美さんは震災以降に自らが綴ってきたことばを読み返すなかで、いま語り方を更新していく必要性を感じているのだという。震災直後の「一辺倒」の応答ではなく、現在の複雑で語りにくい状況を引き受け、語り直していく。語ってしまったことも含めて更新していく姿を見せていくしかない、と。その実感をTwitterで次のように呟っていた。

復興工事が盛んになった頃は、流された土地に花を手向ける人たちが立ち入れなくなること、山が崩されることへの憤りが強くあり、土のうえに出来るまちに対しても懐疑的だった。いまますべてを肯定する気持ちはないけれど、それでも新しいまちで育まれる日々の営みを愛おしく感じているのも本当のこと。

矛盾を孕んだ生活を営んでいくことはむしろ、とても普通のことだとも思う。復興工事に対して憤っていたあの頃の気持ちも本当で、というより今もそれは並行して存在するけれど、生活の中の比重でいうと小さくなっている、という感じかなあ。だからこそあの時の気持ちは、捨てずに提示しようと思う。

瀬尾さんの単著のクラウドファンディングは、

わずか1週間で目標額を達成した。震災後の瀬尾さんたちの歩みが生んだ連鎖反応の結果なのだろう。新たな態度表明は次の連鎖をつくり、新たな水脈となっていく*3。

地中に脈々と流れるような態度を感受する力。それは震災の経験が育んだものなのかもしれない。何もできないと打ちひしがれた姿であっても、そうして身体を傾けてくれることの心強さを多くの人々が痛感したことだろう。震災によって、その意義が可視化されたともいえる。近くの小さな声に耳を傾ける。散在する無数の水脈を汲み上げ、表現に昇華する。それは、ある出来事を体験として共有しえない遠くの人々とも経験として分かちもつ可能性を拓く。さらなる時間の経過は表現に賭ける意義を強めていくのだろう。

回答は、ばらばらかもしれない。それでも、震災が生んだ問いを共有する人たちが、同時代に、さまざまな場所を歩いていることを心強く思う。さて次は、誰とどこを歩いていこう。

*1 | 中崎透「大風呂敷のこと」『FIELD RECORDING vol.01 特集:記録の生態系にふれる』アーツカウンシル東京、2018年
*2 | 佐藤李青「どんなときでも始めることができるー Art Support Tohoku-Tokyo 7年目の風景(5)」アーツカウンシル東京ウェブサイト、2017年11月17日
*3 | 段落冒頭はTokyo Art Research Lab スタディ4「部屋しかないところからラボを建てる」の2018年10月14日の議論内の発言。瀬尾夏美(@seonatsumi) 2018年10月4日のTwitterより引用。クラウドファンディング「震災から7年間、陸前高田で書き続けてきた文章を本にしたい!」(Readyfor)は2018年11月2日に募集開始し、9日に目標額を達成した。

参加者一覧

中崎 透[美術家]

1976年茨城県水戸市生まれ、同市在住。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど形式を特定せずに展開している。展覧会多数。2006年より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年より水戸市内にて遊戯室（中崎透十遠藤水城）を設立し、運営に携わる。2011年より「プロジェクトFUKUSHIMA!」に参加、主に美術部門のディレクションを担当。

山下隆博[写真家]

1984年北海道後志地方出身、東京都中野区在住。日本写真芸術専門学校二部卒。原発立地地域出身であることから、主に国内外の原発問題や、インドの社会問題や河川環境などを主題に制作している。著書『吹雪の日／風の家』（Libro Arte／2014年）、『眺めのいいところ』（小路上藝文空間／2017年）。ASTTのドキュメントブック『6年目の風景をさく 東北に生きる人々と重ねた日々』（2016年）では、撮影を担当した。

村上 慧[アーティスト]

1988年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒。2011年友人と浅草にて「空鼠」を立ち上げ、「吉原芸術大サービス」などを企画。2014年から自作した発泡スチロール製の家で移動生活を行う「移住を生活する」を開始。2016年「瀬戸内国際芸術祭」「岡本太郎現代芸術賞展」、2017年「OpenArt Biennale」(Örebro)、「風を待たずにー村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践」(熊本市現代美術館)、2018年「집의 동사형 (家の動詞形展)」(釜山現代美術館)、「変容する家」(東アジア文化都市金沢)などに参加。著書に『家をせおって歩く』(福音館書店／2016年)、『家をせおって歩いた』(夕書房／2017年)がある。

越後谷 出[写真家]

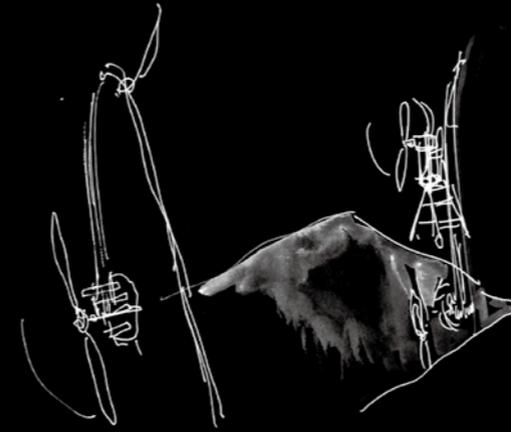
1975年宮城県仙台市生まれ、同市在住。2011年、せんだいメディアテーク7階にて被災し、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」に参加。2012年の脱退後も、定点観測写真等の撮影を通してセンターの活動にかかわっている。個展「流域」(ウェスティンホテル仙台／2015年)、「流域」(ニコプラザ仙台／2016年)。「星空と路一資料室」(せんだいメディアテーク／2018年)出展。

瀬尾夏美[画家／作家]

1988年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。土地の人びとのことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。2012年より、映像作家の小森はるかとともに岩手県陸前高田市に拠点を移し、地元写真館で働きながら、対話の場づくりや作品制作を行う。2015年仙台市で、土地との協働を通じた記録活動を行う一般社団法人NOOK (のおく)を立ち上げ、2017年からは東北アートリサーチセンター (TRAC)を共同運営している。現在も陸前高田を舞台にした作品制作を軸にしつつ、各地に旅をし、その土地の人びとの語りを聞き、物語を書いている。

萩原雄太[演出家]

1983年生まれ。早稲田大学在学中より演劇活動を開始。愛知県文化振興事業団が主催する『第13回AAF戯曲賞』、「利賀演劇人コンクール2016」優秀演出家賞、浅草キッド「本業」読書感想文コンクール優秀賞。かもめマシンの作品のほか、手塚夏子『私的解剖実験6 虚像からの旅立ち』にはダンサーとして出演。STスポット横浜主催の「民俗芸能調査クラブ」では部長を務めた。2018年、ベルリンで開催された「Teheatre treffen International Forum」に参加。



Art Support Tohoku-Tokyo

Art Support Tohoku-Tokyo (ASTT) は、「東京緊急対策2011」の一環として開始した、東京都がアーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)と共催し、東日本大震災の被災地域(岩手県、宮城県、福島県)のコミュニティに対して、現地の団体と協働してアートプログラムを実施する事業です。

都内で展開する「東京アートポイント計画」の手法を用いて、現地のアートNPO等の団体やコーディネーターと連携し、地域の多様な文化環境の復興を支援。被災地域のコミュニティを再興するため、さまざまな分野の人々との交流プロセスを重視したアートプログラムや、その実施を支える仕組みづくりを行っています。

<http://asttr.jp>

表紙 | 中崎 透(Like a Rolling Riceball)
素材:ミクストメディア 2018年

写真 | 越後谷 出

表2・3 | 中崎 透(Like a Rolling Riceball) ドローイング
素材:紙、ペン、水彩絵の具 2018年

東北の風景をさく

FIELD RECORDING

vol.02

特集 表現の水脈をたどる

Art Support Tohoku-Tokyo

編集長

佐藤李青(アーツカウンシル東京)

編集

川村庸子

嘉原妙(アーツカウンシル東京)

デザイン

内田あみか

反訳

薄木利晃(PHILOSYPKOS Co.,Ltd)

印刷

株式会社山田写真製版所

監修

森司(アーツカウンシル東京)

発行

2018年12月27日 第1刷発行

アーツカウンシル東京

(公益財団法人東京都歴史文化財団)

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28

九段ファーストブレイス8階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©アーツカウンシル東京

